

# 考古学の履歴書

カナダで米寿をむかえました

井川 史子

Fumiko Ikawa-Smith

## 目 次

第1回 [アルカ通信 No.177 2018. 6. 1] …… 1	第12回 [アルカ通信 No.199 2020. 4. 1] …… 15
第2回 [アルカ通信 No.179 2018. 8. 1] …… 2	第13回 [アルカ通信 No.201 2020. 6. 1] …… 17
第3回 [アルカ通信 No.181 2018.10. 1] …… 3	第14回 [アルカ通信 No.203 2020. 8. 1] …… 18
第4回 [アルカ通信 No.183 2018.12. 1] …… 5	第15回 [アルカ通信 No.205 2020.10. 1] …… 19
第5回 [アルカ通信 No.185 2019. 2. 1] …… 6	第16回 [アルカ通信 No.207 2020.12. 1] …… 21
第6回 [アルカ通信 No.187 2019. 4. 1] …… 7	第17回 [アルカ通信 No.209 2021. 2. 1] …… 22
第7回 [アルカ通信 No.189 2019. 6. 1] …… 8	第18回 [アルカ通信 No.211 2021. 4. 1] …… 24
第8回 [アルカ通信 No.191 2019. 8. 1] …… 10	第19回 [アルカ通信 No.213 2021. 6. 1] …… 25
第9回 [アルカ通信 No.193 2019.10. 1] …… 11	第20回 [アルカ通信 No.215 2021. 8. 1] …… 27
第10回 [アルカ通信 No.195 2019.12. 1] …… 12	第21回 [アルカ通信 No.217 2021.10. 1] …… 28
第11回 [アルカ通信 No.197 2020. 2. 1] …… 14	最終回 [アルカ通信 No.219 2021.12. 1] …… 30

※この「考古学の履歴書 井川史子 Fumiko Ikawa-Smith」編は  
アルカ通信 No.177～No.219 (2018.6.1～2021.12.1) の「考古学の履歴書」を再収録したものです。

考古学研究所アルカ提供

## 1. 考古学との出会い

1960年の年末に大雪の中をボストンからナイアガラを経てカナダに入国して以来、総合人類学の一部としての先史考古学の研究と教授に携わってきた。このような経歴をたどることになった発端は津田塾大学卒業をひかえた1953年の春、東京都立大学の社会学研究室から津田塾の学生課に来ていた求人募集に応じ、英語の試験を経て、助手補として採用していただいたことだといっただろう。戦後間もない当時、戦前にウイーンで民族学を学ばれた主任教授の岡正雄先生をはじめとして、教授の方々は長い間連絡の途絶えていた外国の機関や学者との交流を復活するについての文通のお手伝いのできるような助手補を求めていられたようだ。そのころの日本にはリチャード・ピアズレー、ハーバード・パッシン、ジョージ・ベネットなど、のちに日本研究者として有名になった文化人類学者、社会学者が多数来ており、これら外来研究者も日本側の先生方も情報の交換に関心がおありだったので、そのような会談の際の通訳も必要だった。岡正雄先生のお供をしてその様な会合に参加させていただいた記憶があるが、英文学科を出たばかりで通訳としてのトレーニングなどうけていなかったのだから、あまりお役立たなかつただろうと思う。

その一方、通信や翻訳のお手伝いをする内容について、民族学・社会学・文化人類学など今まだ知らなかった分野の知識を広めるために本をよみはじめたが、それは私にとって新しい世界が開けることになった。1945年に戦争が終わったとき、それまで皇国日本とか、大東亜共栄圏とかといったイデオロギーをたたきこまれていたのが、がらりとかわって、民主主義の時代となり、自由主義とはわがままの身勝手ではなくて個人の人格の尊重なのだと教えられた。14・5歳のときにこのような価値観の大転換を経験したので、文化・価値体系の相対性を強調する文化人類学が魅力的におもわれたのかもしれない。しかもその頃、評判になっていたルース・ベネディクトの「菊と刀」を読んで、日本へ来たこともない人が、日本文化をこのように浮き彫りにした文化人類学的手法に感銘した。それでこの分野を本格的に勉強することにし、助手補は一年で辞職して、同じく社会学研究室に新設された大学院の社会人類学専攻課程に入学した。

社会人類学科の学習過程としては、当時の新刊書として評判だったピーター・マードックのSocial Structureを東大の東洋文化研究所から出向して

くださった泉靖一先生のご指導で購読するゼミナールや、台北大学から引き揚げてこられた馬淵東一先生による台湾先住民の親族構造に関する講義などは当然だが、これらに加えて当時新発見の縄文早期に関する講義を八幡一郎先生から伺った記憶がある。このような学習課目の配列は主任教授の岡正雄先生が人類科学の諸分野との連結促進をめざして意識的に設定されたように思われる。というのは、岡正雄、石田英一郎、江上波夫、八幡一郎諸先生との対談・討論に基づいた『日本民族の起源』(1958)の「あとがきにかえて」の項で岡正雄先生が次のように述べていられるからだ。「日本における日本民族の源流の研究が、…隣接科学との連結を欠き、何ともみすばらしいのに比較して、…当時のウイーンの人類諸科学の際立った一つの特徴は、人類科学諸分野が相互に密接な関連をもって研究を進めていたことであろう」。このような総合人類学的な雰囲気なかで、先史考古学への志向がめばえ、特に中米の古代文明の起源について勉強したいと考え始めた。泉靖一先生もこの後まもなくインカ文明の調査に出られているから、そのあたりからも刺激があったのかもしれない。

この分野での研究の進んでいるアメリカに留学する希望がかなって、1955年9月にフルブライト奨学生としてハーヴァード大学についた。当時のハーヴァードは男性だけの大学だったから、正確にはラドクリフ大学に登録した。ひと昔前はハーヴァードの教授がケンブリッジ公園の向こう側にあるラドクリフの校舎まで講義しにこられたそうだが、私の行った頃は男女共学になる移行過程だったので、私共女子学生は学期はじめにラドクリフ大学の本部に出頭して登録、授業はハーヴァードのキャンパスで男子学生と同じ教室でうけたあと、学期末試験の際はまたラドクリフ校舎にもどる。但し試験問題はハーヴァードの学生とまったく同じ。その答案をまとめて、ハーヴァードの先生におくり、採点していただいたのを、ラドクリフの本部で整理してわれわれ女子学生に通知するという煩雑な仕組みだった。

各学期4科目登録するのが規定なので、ゴードン・ウィリー先生の「新世界考古学入門」、ハラム・モヴィウス先生の「旧世界考古学入門」に加えて、社会人類学のコースを2科目。フルブライト留学生は聴講生ではなく正規の学生扱いだから、テストやらレポートやらでとても忙しく勉強させられた。初学年がどうやらおわった1956年の夏はメキシコ北部のドラゴン州で6月



中旬から8月始めまで開催されるフィールド・スクールに参加して、中米考古学発掘の初歩を学ぶことにした。この発掘の主催者は南イリノイ大学博物館だが、アメリカ各地から20名ばかりの学生が参加していた。実習の本拠はドラゴ市郊外の砂丘にあるシュローダーという遺跡で、中米古代文明の最盛期のAD500からAD900ころ北進してきた高文化の最北端に位置するチャルチュイテス文化に属している。付近にはアルタ・ヴィスタやラ・ケマダなど同じくチャルチュイテス文化に属する遺跡がいくつか知られており、ピラミッドや石柱、広場などが残っている。シュローダーでの発掘の間にはこのような遺跡の見学に連れて行っていただいた。

当時私も短期留学生在が日本を出るとき発給されたヴィザはアメリカに一回しか入国できないものだったので、実習のあとハーヴァードに戻るためには新しいヴィザが必要だった。そのために数日のお暇をいただ

いて、バスでメキシコシティのアメリカ総領事館に出頭し、再入国するためのヴィザを申請したわけだが、ヴィザのできるのを待っている2-3日のあいだに、テオティワカン遺跡などメキシコシティ付近の著名遺跡を見学し、テオティワカンの有名なピラミッドに登ってみたりすることができたのは幸いだった。



▲LaQuemada(1956夏)

## 連載 ◆ 第 2 回 ◆

アルカ通信 No.179 / 2018. 8. 1

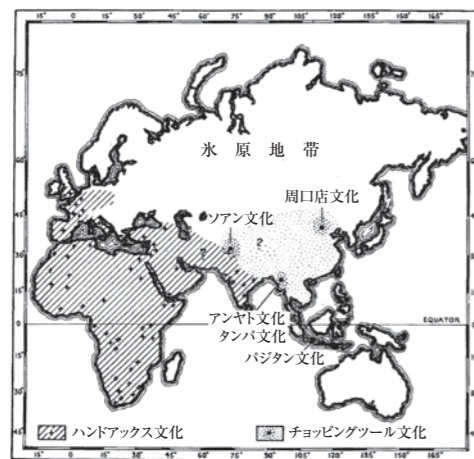
### 2. 日本旧石器研究との接点

アメリカでの院生生活の2年目を終えた1957年の夏は、昨年のメキシコ高文化遺跡と対照的な狩猟採集民の遺跡の発掘を経験することになった。それはカナダのブリティッシュ・コロンビア州のロッキー山脈内の水源から、アメリカのワシントン州、オレゴン州を経て太平洋に注ぐコロンビア河の中流地点にあるプリースト・ラピッズに1955年から1960年にかけて建造されたダムによって水没・破壊される考古遺跡を発掘調査するプロジェクトに参加したからだ。コロンビア河はこのあたりで川幅が狭くなっていて、サーモン漁に絶好の地点だったので、先史時代から最近まで原住民が狩猟採集生活を営んだ

痕跡が多数残っている。プリースト・ラピッズ・プロジェクトの担当者は、その年1957年に博士課程を終了して、シアトル市のワシントン大学に就職されるハーヴァード大学院の先輩ロバート・グリッゴ博士で、ワシントン大学の学生に当地付近の高校生などを交えた20名ばかりの作業員に私もハーヴァードの後輩数名が加った。

ハーヴァードから参加した仲間でもその後も親しくさせて頂いた考古学者としては、後にカナダのアルバータ大学の教授となったアラン・ブライアンや、当時、ハーヴァードの女子部ラドクリフ大学の学部生で、後にブライアンと結婚して、同じくアルバータ大学の教授になったルース・グルーエンがいた。新大陸へ最初に渡来したのはBC11,000年頃に北米全土にクロヴィス型尖頭器をひろめた人たちだというのが通論だったが、ブライアンとグルーエンはそれよりずっと遡るという少数派の立場を固持していて、その証拠を求めて、北米西部から中・南米各地で多数の遺跡を精力的に発掘調査している。ブライアンは2010年に亡くなるまでに、新大陸の先史時代に関するシンポジウムや論文集をいくつか主催している。太平洋の向こう側の日本列島にはどのような石器群がいつ頃あったかということは新大陸への人類拡散に関係があるので、私もブライアンに招かれて彼の企画したシンポジウムに参加し、論文集に投稿したことがある。

このように、私はここ数十年間、日本の旧石器考古学を専攻するものとして北米の学界で扱われることになったが、今から思えば、その起点は、プリースト・ラ



▲ハンド・アックス文化とチョッピング・ツール文化の分布図  
モヴィウス (1949, p.409) による  
Hallam L. Movius, "The Lower Palaeolithic cultures of southern and eastern Asia", Transactions of the American Philosophical Society, N.S. Vol. 38, Part 4. 1949.

ピッズ発掘に先立つ1957年の春学期の単位登録に求められるとおもわれる。ハーヴァードの修士課程では4科目に登録するのが規定だったが、私の時間表にうまくはまる科目がどうしてもひとつ足りない。どうしたものだろうと思案していたら、そういう場合は、個人指導による特殊購読で埋めればよい、アジア考古学で有名なハラム・モヴィウス博士にお願いしてみれば、と友人に勧められた。モヴィウス先生は1940年代に東アジア・東南アジアの前・中期旧石器文化はアフリカやヨーロッパの同時代の文化とは性格が異なることを指摘されたことで有名な考古学者だが、ハーヴァード内部では気難しいことでも有名な先生だった。それで先生の研究室に恐る恐る参上して、購読コースの指導をお願いしたところ、意外にも快く承知してくださった。今から考えると、モヴィウス博士にとっても好都合なタイミングだったのではないと思う。

1949年の岩宿遺跡発掘によって日本列島にも縄文文化より古い人類遺跡があることが明らかになると、更新世の地層を包含層とする遺跡が各地で発見・調査された。東アジア旧石器文化研究の第一人者とされていたモヴィウス博士のところへは、1956年に出版された岩宿遺跡の報告書、同じく1956年出版の樽岸遺跡の報告書をはじめとして、多数の発掘報告、論文、概説などが送られてきていたが、日本語の本文に英語の要旨がついている程度で、日本語の読めない人には内容はよくわからない。欧文のものとしてはミシガン大学のピアズレー博士がアメリカのアジア学会 (Asian Studies Association) の機関紙、Far Eastern Quarterly (現在名はThe Journal of Asian Studies) に1955年に発表した、“Japan before history: A survey of the Archaeological records” (考古学からみた日本の先史時代) と題した論文があるが、約30頁の力作の冒頭2頁ほどを先縄文文化にあて、岩宿その他各地で遺物が最近見つかるから、縄文時代以前の日本列島に人類が到来した痕跡を追う熱が高まることだろうという予想論にとどまっている。遺跡・遺物を詳しく考察したもの

## 連載 ◆ 第 3 回 ◆

アルカ通信 No.181 / 2018. 10. 1

### 3. 芹沢長介氏との遠距離共同作業のことなど

1957年の初秋、西海岸に面したワシントン州のプリースト・ラピッズ遺跡での発掘を終え、再び大陸を横断してボストン近郊のハーヴァードに戻り、院生生活の三年目をむかえた。当年度の課題は人類学の大学院課程を修了するための口頭試問をめざして勉強

としては、南山大学教授で、市川市の考古学研究所の所長をしていたヨハネス・マーリンガー博士が権現山と岩宿の遺物群を国外の旧石器文化の遺物と比較した論考を英文と独文で3点ずつ、計6点を1956-1957年に発表している。一方、これより前の1954年に国際基督教大学のJ.エドワード・キダー博士が岩宿、藪塚、殿ヶ谷戸、熊の郷、茂呂、茶臼山などから出土したといわれる“先縄文文化”の石器は縄文時代の遺物が二次堆積したものではなかろうかといった懐疑論を提出している。欧文の資料だけによれば、“先縄文文化”問題は混迷状態だったといえよう。

それで私に与えられた課題は、モヴィウス先生の研究室に山積していた文献を読んで、わけのわかるようなレポートにまとめなさいということだった。そして、もし必要な文献や質問があったらこの人に連絡すればよいと言ってくださったのは明治大学の杉原荘介先生のお名前と住所だった。ご指示に従ってお手紙をだしてみたら、返事を下さったのは、当時大学院博士課程の最終段階におられた芹沢長介氏だった。この書面には残念なことに日付がはいついていないが、内容から推してはじめていただいたお手紙にちがいない。“お手紙昨日拝見しました。日本の無土器文化がアメリカでも問題にされていると言うこと、噂にきいていました”ではじまり、“モヴィウス教授に出す論文にはできるだけお手伝いしますから、どしどし質問をお送りください”と親切にしてくださった。お言葉どおりに文献や写真を提供していただいて、私のレポートは無事に仕上がった。モヴィウス先生に提出したら、大変満足されたようで、出版することをすすめられた。その件の今後の展開については次回でおはなしするが、この特殊購読コースが私の日本旧石器文化とのお付き合いのはじまりだ。但しこの時点では日本旧石器文化が私キャリアの焦点になるとはぜんぜん念頭になかった。2年目の春学期を無事に終えて夏休みにはいったのでクラスメートたちとアラン・ブライアンのステーション・ワゴンに乗りこんで、西海岸のプリースト・ラピッズでの発掘をめざして大陸横断の旅に出発した。

すること。ハーヴァードの制度では修士論文はないが、博士課程に進むにはジェネラル・イグザミネーションとスペシアル・イグザミネーションの二段階の口頭試問を通過しなければならない。当時のハーヴァードの人類学科は徹底的な総合人類学だったから、ジェネラル・イグザ



## 4. チャード博士の日本先史学プロジェクトと杉原壮介博士の来訪

先回に述べたアジア・パースペクティブ誌 (Asian Perspectives) の第2巻第2号は旧石器特集号として1958年に出るはずだったのが、いろいろの事情で実際に発行されたのは1960年の3月だった。表紙の上部には“Winter 1958”とはっきり標示されているが、下部には実際の発行年月“March 1960”と印刷されているから、芹沢長介氏と共著の論文は Serizawa and Ikawa 1958 と引用されたり、Serizawa and Ikawa 1960 と表記されたりしている。この旧石器特集号のゲスト編者をされたモヴィウス先生は私たちの論文のことを、日本の旧石器文化を包括的に扱った唯一のものだと緒言でいってくださったが、その地位は長く続かなかった。というのは、同じ1960年の秋、アメリカ人類学会の機関紙、アメリカン・アンソロポロジストにウイスコンシン大学のチェスター・チャード博士と、当時同大学の院生だったハルミ・ベフ氏との共著論文、「日本の先土器文化」(Befu, Harumi, and Chester S. Chard. 1960. “Pre-ceramic cultures in Japan”, American Anthropologist, 62:815-849.)が出たからだ。読んでみておどろいたのは、研究史からはじまって、用語の説明、遺物群の記述と編年、国外の文化および縄文文化とのとの関係を論じており、私たちの論文と構造も似ているし、国外の旧石器文化との関係に関する見解もあまり違わない。私はチャード博士に、論文を大変興味深く拝見しましたと言う旨の手紙を書き、但し遺跡名のローマ字表記が私たちの使ったものと違って漢字を知らない人には混乱をきたすのではないかと(たとえば、城山をKiyamaでなくShiroyamaと書いているなど)と言い添えた。私の手紙は11月7日付、折り返し11月11日付の手紙でチャード博士は、アジア・パースペクティブのすばらしい論文のを知っていたら同じようなものを書くことなど計画しなかったろうが、アジア・パースペクティブの旧石器特集号がでたときはこちらの原稿はすでにゲラ刷りに入っていた段階だったとのこと。遺跡名の読み方の違いについてはアメリカン・アンソロポロジストとアジア・パースペクティブの両方に告示を出してもらいましょうということだった。

ハルミ・ベフ氏はウイスコンシン大学で博士課程修了後、1965年以降カリフォルニアのスタンフォード大学を拠点に日本の文化・社会組織の研究者として活躍されている。チャード博士はアーケティック・アンソロポロジ誌 (Arctic Anthropology) の創設者、1960年代から1974年に引退されるまで、ロシア、韓国、日

本などの考古学者と北米の考古学者の交流に大いに貢献された。特に1960年代にはいくつかの財団から資金を得て、日本先史学プロジェクト (Japanese Prehistory Project) を発足させ、当時の新進考古学者を日本から招聘する一方、アメリカの学徒の日本考古学研究を支援した。日本から行ったのは、吉崎昌一にはじまり、岡田宏明・岡田淳子夫妻、林健作、小林達雄と続く。この方たちがウイスコンシン滞在中、またはその直後に Arctic Anthropology に発表された論文、たとえば林健作の福井洞穴の細石器を北米・北東アジアのコンテクストに置いて論じた論考 (Hayashi K., 1968. “The Fukui microblade technology and its relationships in Northeast Asia and North America”, Arctic Anthropology 5 (1), pp. 121-190)、小林達雄の細石刃文化論 (Kobayashi, T., 1970. Microblade industries in the Japanese archipelago. Arctic Anthropology 7 (2), pp. 38-58)、そして岡田夫妻とチャード博士の共同作業による成果、北海道考古学に関する膨大な文献集に英文解説を付けた力作 (Okada, A., H. Okada, and C. S. Chard. 1967. “An annotated bibliography of the archaeology of Hokkaido”, Arctic Anthropology 4 (1), pp. 1-163)などは、英文で日本考古学を扱った資料の少なかった頃だけに、特に貴重なものだった。当時のウイスコンシン大学の院生でチャード博士指導のもとで日本の考古学に取り組んだ人々には、北海道の先土器文化を勉強して、ホロカ技法を定義したりチャード・モーラン (Richard E. Morlan)、本州以南の先土器文化について概説をまとめたヴァルダ・モーラン (Valda Morlan)、北海道のハマナス野・八木遺跡の発掘調査をしたビル・ハーリー (William Hurley)、そして東北大学で芹沢先生のご指導を受けながら日本考古学各時代の諸問題についていくつかの論文をまとめたピーター・ブリード (Peter Bleed) などがある。

この方達のカナダにおける日本考古学研究への貢献についてはまたのちに触れさせていただくことにして、1960年代のはじめに話をもどすと、私は1959年に同じくハーヴァードの院生だったフィリップ・スミス (Philip Smith) と結婚し、1960年5月に長男ダグラスを出産した。フィリップはモヴィウス先生のアプリ・パター遺跡1958年度発掘の助手を務め、モヴィウスを公式指導教授として旧石器研究者として有名なフランスのフランソワ・ボルド (François Bordes) の指導も受けたながらフラン

ミネーションでは、専門分野にかかわらず、民族学、社会人類学、考古学、から形質人類学、言語人類学に関する知識も試される。これを通過すると、スペシアルでは専攻分野、専攻地域について専門の先生方が諮問される。これらのイグザミネーションのために配布された参考文献のリストは1センチくらいの厚さだったと思う。

その勉強の一方、前年度からの懸案はモヴィウス先生に提出した日本の旧石器に関するレポートを公表できるような形にすることだった。岩宿発掘から10年もたっていないが、すでに北海道から九州にいたる各地で100ヶ所近い遺跡が確認されており、これらについての概観や展望も出版されていた。杉原壮介の「日本における石器文化の階梯について」(『考古学雑誌』1953)、「縄文文化以前の石器文化」(『日本考古学講座』1956)や芹沢長介の「関東及び中部地方における無土器文化の週末と縄文文化の発生に関する予察」(『駿台史学』1954)、「日本における無土器文化」(『人類学雑誌』1956)などである。ところが、日本語以外の文献としてはマーリンガーが権現山 I、II、IIIの石器群と岩宿のIとIIについてドイツ語と英語で紹介した論文が3点づつあるのみで、各地から出土している多様な石器群の全貌についてのまとまった記述は皆無だった。私がモヴィウス先生に提出したささやかなレポートはホットニュースだからどこかに公表すべきだと周囲から勧められて、その年の12月にシカゴで開催されたアメリカ人類学会の年次大会で発表することにした。

アメリカ人類学会 (American Anthropological Association) は総合人類学の全分野を網羅する学会で現在の会員数は10,000名以上、年次大会には5,000名以上があつまる。60年前のシカゴ大会がどのくらいの規模だったのか記憶もないし、記録もみつからないが、エライ先生方が大勢来ていられたのは確か。その前で「日本の先縄文文化」と題する発表をさせていただいた。アメリカに来て2年半足らずの院生だったのだから、おそらくとどろしい発表だったろうと思う。いずれにしても15分の時間制限があるから、詳しいことはいえないが、プリースト・ラピッズ発掘で知り合ったワシントン大学人類学科の人たちが、この舌足らずの文章をほとんどそのままの形で同学科が出しているデイヴィッドソン・ジャーナル・オブ・アンソロポロジー (Davidson Journal of Anthropology) という刊行物の第3巻2号に巻頭論文として印刷して下さった。但しタイトルは「日本の無土器時文化」(Non-Ceramic Culture in Japan) と置きかえている。当時、縄文以前の石器群の呼称として、“先縄文式文化”、“先縄文

文化”、“無土器文化”、“先土器時代の文化”、または単に“石器文化”などの用語が使われていた。“旧石器”と言いつつ人はまだなかったようだ。杉原氏はそのころは“縄文文化以前の石器文化”という言い方をしていたが、1960年代から“先土器時代”に落ち着いたようだ。芹沢氏は“無土器”を使っていたから、私はその影響でタイトルを変えたのだろう。

私の小文は日の目を見たが、この時点で本当に必要だったのは、日本の旧石器文化の遺物群を詳しく記述し、その相互関係や周辺文化との比較をした論考だった。丁度このころ、極東先史学会 (Far-Eastern Prehistory Association) の機関誌としてアジア・パースペクティブ誌 (Asian Perspective) が発足し、1958年発行予定の第2巻第2号は、モヴィウス先生をゲスト編者として旧石器特集号とする計画があった。私もこれに参加することになり、例のレポートを更新・拡張するについて、その際お世話になった芹沢長介氏に正式に共著者になっていただくことにし、芹沢氏との遠距離共同作業がはじまった。Eメールもファックスもない時代だから、やり取りに随分時間がかかる。しかも、この1958年の春から夏にかけて、芹沢氏は、荒屋、白滝、タチカルシュナイ、神山など次から次へと発掘調査に出ているので、連絡が途絶えることがしばしばあった。その一方、これらの遺跡で得られた情報を書き込むことが出来たので、最新情報を網羅した論文になった。「日本最古の考古学的資料」(The Oldest Archeological Materials from Japan) という表題は少し大袈裟だが、これはモヴィウス先生の示唆によったものだ。私共の原稿を受け取られたとき、編者のモヴィウス先生は大変満足され、私宛の書簡で、日本の最古の考古資料をこれほど包括的に扱ったものは今まで何語でもなかったと言ってくれているが、それと同様のことを、編者の緒言でもくりかえされている。

モヴィウス先生のご指示で日本旧石器文化研究の原動地であった明治大学考古学研究室の考古学者とお知り合いとなり、日本旧石器に関する英文の文献の最初期にかかわらせていただいた。杉原壮介先生に直接お目にかかったのはこれより2年先の1960年、芹沢長介先生とはさらに3年後の1963年だった。それらの事情については次回で触れさせていただくことにする。

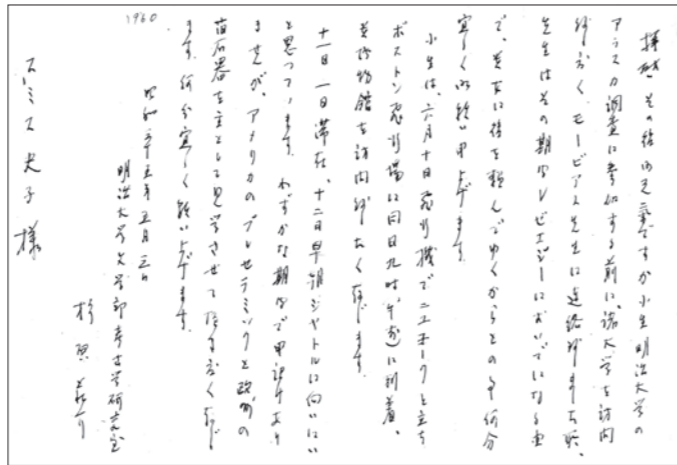


▲Hallam L. Movius 博士 (1907-1987) [Harvard News Office 所蔵]



スのソリュートレ文化について博士論文をかいていた。ダグラスが生まれたのは5月6日、産院のベッドにいた私をたずねてきたフィリップが「こんな手紙が来ているよ」と持ってきたのは杉原壮介先生からの5月3日付の書簡だった。ごらんとおりの書面で、アラスカ調査に行く途上、ハーヴァードによって、考古資料を見学したいのでモヴィウス先生に連絡したら、フランスへ発掘に出発して留守になるから私に頼んでおくとのこと。そのようなことは聞いてなかったもので、おどろいたし、産後間もないので飛行場にお迎えに行ったり、博物館をご案内したりするのは無理。フィリップが代理で飛行場にお迎えにいったが、見たこともない男が、「杉原先生ですか?」と声を掛けて、ボロ車にお荷物を積んだりしたので、杉原先生は心配そうなお顔つきだったとフィリップは言っていた。短いご滞

在だったが、ハーヴァードのピーボディ博物館の資料を見学され、私どものアパートにもきていただいて、生後1ヶ月のダグラスに会っていただいた。ダグラスにはまた3年後に帝釈峡で対面していただくことになる。



▲杉原さんからの書面

連載 ◆ 第 5 回 ◆

5. エジプト廻りで久しぶりの帰国

カナダに永住者として入国したのは1960年の年末、カナダ人の夫フィリップがトロント大学に就職することになったので、生後6ヶ月の長男、10歳の老猫、家財道具一切をボロ車とレンタルのトレーラーに積み込んで、大雪の中を北上した。ナイアガラで国境をこえて目的地についた時には、車のトランクの片隅においたオムツ入れのビニール袋が大きな氷塊になっていた。

年があけて私共がトロントに落ち着き始めていたころ、地球の反対側では洪水制御と農地開発のためナイル河上流のアスワンに新しくダムを建造することを計画していた。ダム建造も大事業だが、アブシンベル遺跡などダムによって水没または破壊される文化財の保護や、水没する地域の集落を移動する移転先の文化財を緊急事前調査することなど当該国のエジプトとスダンだけでは手に負えない大仕事なので、ユネスコが調整して諸国から考古学調査団を派遣することになった。カナダ政府もそれに参与し、トロント大学に就職したばかりのフィリップ・スミスの率いるささやかな調査団を派遣することになった。

フィリップは1961-62年の年末-年始を利用して予備調査のためアスワンに出向いて現地状況を観察、アメリカ、フランス、ソ連などからくる調査団の代表者とも会談した結果、カナダの調査団は、エール大学の動物学者が率いるアメリカの調査団と共同で、アスワンから約50km下流にあるコモンボ平原(Kom Ombo)の

旧石器時代の遺跡群を調査することになった。現在この地域は砂漠だが砂に埋もれている化石からみるところ1万年以前は動植物相も豊かで、これを対象にした狩猟・採集民の旧石器文化がいくつか存在していたらしいことが1920年代にアマチュア考古学者が採集した遺物から知られていた。ダム建造後は砂漠を灌漑して農地として開発し、ダムで水没する地域の集落をこのあたりに移動しようという構想なので、その前にこの地に存在した旧石器文化の様相をできるだけ保存したいという意図だった。

カナダ・アメリカ合同調査団の本調査は1962年の秋から翌63年の春にかけて行なう予定なので、これを目指してスミス一家は62年8月にトロントを出発した。発掘用の車輛や道具など荷物が多から移動には飛行機より船舶の方が適当。地中海に面したアレキサンドリアからエジプトに入国し、首都カイロで事務手続きのため一月ほど滞在したのちアスワンにむかった。アスワンでは私ども一家とアメリカ調査団のリーダーの家族はエジプトの文化財を管轄する官庁が調達してくれた宿舎に合宿、調査員はあちこちのホテルや民家に分宿して調査がはじまった。1920年代の採集品から多様な石器文化があるらしいことはわかっていたが、調査の結果、少なくとも5種類の石器文化を確認でき、更新世末期のアフリカ東北部の状況について新しい情報を得ることができた。フィリップは発掘の成果

についていくつかの論文を発表している。

4月にコモンボでの発掘調査を終了、出土品を荷作りしてカイロに送り出し、私どもは車でナイル沿岸を下ってカイロにむかう。その途上ルクソルの神殿や「王陵の谷」などの史跡を見学した。カイロではまた、発掘調査終了に関する事務や出国手続きなどに時間がかかって出国の準備が完了したのは5月の末だった。

当時の入国管理規則の関係で、私は1955年にアメリカ留学のために出国して以来一度も帰国していない。留学生ではなくなっているのに、戻ったらアメリカに再入国出来ないからだ。カナダ永住者になって、日本からの再出国もカナダへの再入国も可能になったので、エジプトからの帰途は日本に寄って、考古学情報を更新すると同時に、フィリップとダグラスを私の家族に紹介することを計画していた。ポートサイドからデンマークの貨物船に乗船、スエズ運河を経て紅海をくだり、インド洋にでた。マレー半島のペナン、バンコック、サイゴン、香港などに寄港して、横浜に着いたのは7月4日。寄港地で貨物船が荷揚げ、荷積みをしている間、乗客は上陸して市街・史跡の観光をする。貨物船の乗客は10名足らずで私たち以外はすべて退職後の方々のようだった。ゆっくりした旅程は時間の制約にとられないシニアに向いていると同時に、私たちにとても発掘後の休養に最適だった。子供は3歳のダグラスひとり、船内のベットのようになって、上のデッキにあるオフィスから船底に近いところの作業員たちのたまり場まで自由に駆けまわらせてもらっていた。

日本には7月初旬から8月半ばまで一ヶ月半ばかり滞在した。当時私の両親は堺市に住んでいたが、妹

連載 ◆ 第 6 回 ◆

6. 無土器文化の終末と縄文文化の起源

エジプトでの発掘に参加した帰途1963年の真夏を日本で過ごして8月末にトロントに戻った。9月に新学年が始まると、新任助教授のフィリップは講義や会議で忙しい一方、3歳になったダグラスは保育園に通いはじめたので、私はエジプトから届いた発掘品の整理をしながら、日本の考古学研究の現状などについて国外から見た印象を学会で発表したり雑誌に投稿するためにまとめたりしはじめていた。翌年の1964年からは私も非常勤講師としてトロント大学人類学科で授業を担当することになる。

杉原壮介先生、芹澤長介先生をはじめとして日本滞在中にお目にかかった研究者の方々からは帰国後も出版物、新聞切り抜きなどお送り頂いたり、有望な遺跡を

夫婦の家が横浜にあったので、そこをしばらく本拠とさせてもらって、東京付近の研究機関や遺跡をたずねた。数年前に論文を共著させていただいた芹沢長介先生に初めてお目にかり、先生のご案内で、岩宿、権現山、不二山などの遺跡を見



▲帝釈峡にて 左から、フィリップ、史子、ダグラス、杉原先生

学し、相沢忠洋さんのお宅へもつれて行っていただいて、蒐集された遺物を見せていただいた。権現山遺跡についていくつか論文を書いたマリンガーも実は遺跡へは来ていないから、権現山遺跡を実際に見た外国人の考古学者はフィリップが初めてだと相沢さんにいわれて、彼は喜んでた。

明治大学にも参上して杉原壮介先生に3年ぶりで見学した際、広島県の名勝地、帝釈峡の遺跡群の調査計画のことをうかがったので、発掘調査を見学させていただくことにした。この写真の撮影者は当時明大考古学教室助手、後に同大学の学長になられた戸沢允則氏だったとおもう。このようなご縁で1965年に杉原先生の編集で河出書房新社から出版された『先石器時代』に「西南ヨーロッパにおける旧石器時代研究の現状」をフィリップが書き、私が日本語に訳して寄稿させていただいた。

発掘する計画、その進行状況や、成果の速報などお知らせいただいた。そういった通信の多くはこちらから差し上げた書簡のカーボンコピーと一緒に私宅のファイル・キャビネットにいまも残っているが、そのような通信の日付けをくらべてみると、インターネットのなかった時代の航空便の集配は今より迅速だったように思われる。

私に関心をもっている旧石器関係の話題のうちで当時特に活発な論議の交わされていたのは日本列島における旧石器時代の始まりと終わりに関する新資料や解釈、要するに(1)“前期旧石器問題”と(2)無土器文化の終末と縄文(縄紋)文化の始まりに関する論争だった。いずれも私自身、博士論文や国際シンポジウムを通してかわりを持つことになるが、帰国後



まもなくとくんだのは旧石器(=無土器=先土器)文化から縄文文化に移行した経過についての情報とこれに関する論争の論点をまとめてみることにした。これについて、1964年3月にカナダのハミルトン市で開かれた北米東北部人類学カンファレンスで、「無土器文化から土器文化への移行について」(“Continuity of non-ceramic and ceramic cultures in Japan”)と題する発表をし、同年11月にはデトロイトでのアメリカ人類学会年次大会では「日本における中石器的文化現象」(“The mesolithic manifestation in Japan”)という題名で発表した。

先土器から縄文への移行についての論争の口火となったのは、井草・大丸式に続いて2番目に古いとされていた夏島式土器のC<sup>14</sup>年代の公表が発端だったと理解している。夏島貝塚の本調査が実施されたのは1950年3-4月と1955年6月、杉原壮介・芹沢長介両先生の署名入りの報告書(明治大学文学部研究報告 考古学 第2冊「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」)をいただいているが、1957年12月発行のこの報告書にはラジオカーボン測定のための資料を採集したことや、それをミシガン大学へ送ったという記述はない。報告書の共著者の芹沢長介氏の『石器時代の日本』(1960)によると、夏島貝塚のカキの殻約450グラムと木炭約5グラムを放射性炭素法による年代測定のための資料として1957年の初冬にミシガン大学に送り、1959年6月にその測定結果がミシガンのグリフィン教授から杉原壮介教授への書状で通知されたということだ。カキ殻(M-769)は9450±400前のも、木炭(M-770, M-771.)は9240±500で、夏島の土器は当時としては世界最古ということになった。

縄文遺跡のラジオカーボン法による年代測定はこれが初めてではなく、姥山貝塚の住居址床面から採集された木炭と、加茂遺跡出土の丸木舟の破片について、それぞれ4546±120(C-548)と5100±200(M-240)という

結果は知られていたが、姥山は縄文中期、加茂は縄文前期だからC<sup>14</sup>年代はほぼ妥当な数値としてうけとめられていたようだ。これに対して夏島の土器は9000年以上前まで遡るという情報は全く想像外だから活発な論議の対象となるのは当然で、縄文文化(山内氏によれば“縄文”ではなく“縄紋”文化)研究の大御所の山内清男は佐藤達夫との共著の論文(週刊読売1962)その他で、強力な反論を展開している。まもなく夏島式よりも古い形式の土器を出土する遺跡が各地で見つかり、福井洞窟、上黒岩岩陰などでさらに古い計測値も得られたので夏島のC<sup>14</sup>年代はユニークなものではなくなったが、それだけに議論の対象もひろがった。無土器文化の終末期、または縄文文化の初期の遺跡で局部磨製の石斧や円盤が出土するので山内らは、これらの遺跡は新石器時代に属するものだと断言し、本の木遺跡などで多数に出土する石槍は北東アジアの例を見ると植刃として使われたものと思われるから、これらの遺跡の年代はシベリアのイサコヴォ期4000-3000BCに近いだろうとしている。佐藤達夫がC<sup>14</sup>年代法による年代測定については極めて懐疑的なことは、1964年1月13日付けの書簡で13,000年BP頃のものとして示されている北米のクロヴィス・ポイントなども、形態から見てC<sup>14</sup>年代の示すほど古いとは思われないといっていることからあきらかだ。日本列島で土器文化が始まった年代について、C<sup>14</sup>による年代によるか、遺物の対比に依頼するかの論争がしばらく続いた。



▲シベリアの植刃

連載 ◆ 第 7 回 ◆

7. 前期旧石器をもとめて

1960年代の初期に日本考古学界の関心をあつめていたもう一つの問題はいわゆる“前期旧石器”論だった。1949年の発掘で岩宿遺跡のローム層から検出された大型楕円形の石器や、同じく群馬県の権現山で相沢忠洋が採集した大型石器は、当時の文献に「ハンドアックス」(又は訳して「握槌」)と記述されており、アフリカ、ヨーロッパからインド半島にかけて知られているハンドアックスを含む石器群に対比され、旧

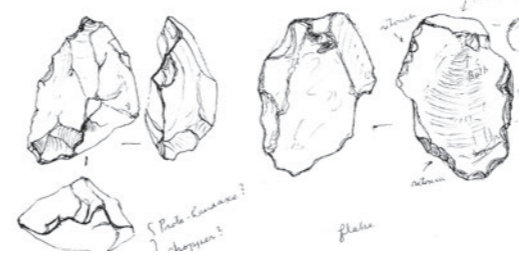
石器時代のかなり古い部分に位置するだろうという意味合いだった。ところが、岩宿遺跡の発掘以来活気を帯びたローム層の地質学的研究の結果、岩宿第一文化層の大型石器の包含層は南関東の立川ロームの下部にある腐植土からなる第一黒色帯に相当することが明らかになり、その年代は旧石器時代の後期に属することになった。

芹沢長介は1960年版の『石器時代の日本』で岩

宿第一文化層の大型楕円形の頁岩製石器は全体が摩滅しており、特にその一個は「先端部が局部磨製の石斧のようにみえるほどひどく摩滅してしている」とことを記録しているが、「これはおそらく過度の使用によって生じた磨痕であろう」として、これをインドシナにおける沖積世初頭のホアビン文化に見られる局部磨製石斧と関連つけようとするマリンガーの観点に強く反発している。岩宿第一文化層からは石刃や搔器も出土しているから、大型楕円形石器は「おそらく握槌としては最末期の退化形態であろう」というのが芹沢の見解だった。そこで退化以前のハンドアックス／握槌を含む前期旧石器文化の追求となる。

まもなく「やっとのことで日本でも前期旧石器もしくは中期旧石器が出てきました。しかも私がこの手で掘り出したものです」というニュースがとどいた。これは1964年3月8日付の書簡で、1953年以来発掘調査中の大分県早水台遺跡で調査の対象となっていた縄文早期押型文の層より下にある安山岩礫層から石英製の石器とおもわれるものが数点摘出されたとのことだ。当時航空使用に使ったペラペラの用紙に芹沢氏がボールペンの手書きで石器数点をスケッチしたのが添えてあった。ここに添付するのはその一部。同じ文書のなかに、1962年以来古代学協会の角田文衛らが調査している、丹生遺跡出土の石器に関する批判的なコメントがあり、そして3月末には福井洞穴を掘りますとのこと。その次にいただいたお便りでは3月20日から4月9日に実施された福井洞穴の第三次発掘で、洞穴の基盤直上(15層)からハンドアックスとフレイクが出土したとを、これも手書きの図を添えてお知らせくださっている。福井洞穴第三次発掘を終えた翌日にまた早水台に戻られたらしく、4月10日-15日の第5次発掘で数百点の石器がえられたとのこと。これについて、芹沢氏は「まちがいがなく前期旧石器です」と自信に満ちた表現をしている。

ちょうどこのころ、スペイン、バルセロナの先史学・考古学研究所(Instituto de Prehistoria y Arqueologia)のリポール・ペレロ(Ripoll Perello)らが1961年に他界された有名な旧石器研究者アンリ・ブルイユ(Henri Breuil)に捧げる論文集を編集して



▲芹沢長介氏手書きのスケッチ

おり、私の夫フィリップにも原稿の依頼があった。編集企画によると、2巻にわたる膨大な論集で当時の旧石器考古学の決定版になるような出版物を目指しているらしく、ハーヴァード大学のハラム・モヴィウスやボルドー大学のフランソワ・ボルドなどのほか、中国から裴文中も寄稿するらしいが、当時まだ国際的に広く知られていなかった日本の旧石器文化はプランにはいっていないようなので、芹沢さんに何か書いていただくようお願いしたらとフィリップが編者に提案したところぜひお願いしてくれるように頼まれた。これをお伝えし、もし英語で書くことが面倒で、適当な英訳者がみつからない場合は、私が英訳をお引き受けしてもいいと書き添えた。折り返しのご返事で、「日本から発見された前期旧石器文化」という題目で早水台に関する新しい情報を報告したいとのこと、そして地質に関する部分は当時東北大学助手だった中川久夫氏が共著者として担当されることになった。各地の遺跡調査や発掘品整理でお忙しい芹沢氏から、細切れでとどく原稿を私が英訳してスペインに届けたのがその年の7月、翌1965年秋に出版されたMiscelanea en Homenaje al Abate Henri Breuilの第2巻に図版10枚をつけて所収されている。これとは別に第5次発掘までの成果は東北大学の『日本文化研究所研究報告』第一集として1965年3月に詳しく報告されている。

いっぽう、同じく大分県の丹生遺跡の調査は1962年に開始されて以来、毎年秋に発掘調査がおこなわれ、その都度、調査結果の概報がでており、1968年には調査概報の総括編が刊行された。この方は国際的公表が手早く、ドイツから出ているQuartärの14巻、1962/63年版に佐藤達夫・坂口豊の共著で“The Nyu industry and other Palaeolithic remains in Japan”という短報をだしている。

1960年代のはじめ頃の前期旧石器論の主要対象は早水台と丹生、早水台の問題点は芹沢氏らの言う“石英製石器”は本当に人工品なのかということ、丹生の場合は石製品がヒトによって加工されたものであることはまちがいないが、それらが果たして更新世の古いところにあった包含層に包含されていたものかということ。そこへ新しく加えられた福井15層のハンドアックスとフレイクは人工品であることも、層位がはっきりしていることも問題はなく、しかも共存していた木片は31,900BPより古いという放射性炭素測定値も得られたが、出土品数が少なく、他に類例がないのが難点。そして1965年代後半から70年代にかけて調査が始まった栃木市星野遺跡、その付近の向山、大久保、そして岩宿遺跡の最下層などから出土した石製品



について、同様の議論が続いていた。1970年代には、人工による石器であることにまちがいはなく、層位も確かだ。テフラによる年代もはっきりしている例が仙台を中心とする北日本から次々と報告された。藤村

連載 ◆ 第 8 回 ◆

アルカ通信 No.191 / 2019. 8. 1

8. チャード博士と考古学関係の訳語集成

エジプトから戻った翌年の1964年から息子は幼稚園にかよいはじめたので、私もトロント大学の非常勤教員として、文化人類学の授業を担当することになった。講義の準備に追われながら、スペインで出版されたアベ・ブルイユ記念論文集に所収された芹沢長介・中川久夫両氏共著の草水台に関する報告の英訳を引き受けたり、1964年3月にオンタリオ州ハミルトンで開かれたアメリカ東北部人類学会の年次大会で、日本の先土器文化から縄文文化への推移に関する発表をしたり、その年の11月にデトロイトで開催されるアメリカ人類学会の年次大会で同様のことを「日本における中石器的現象」と題して発表する準備をしたりしてかなり忙しく暮らしていた。そのころ、前にも触れたウィスコンシン大学のチェスター・チャード博士から私の夫、フィリップ宛てにお便りがあって、おたくの奥さんが日本の先史時代にとり組んでいられるということを知りました。日本国外で日本の考古学に関する情報を発信しているのは彼女と私たちのグループだけでしょうから、数年前に“先土器文化の概要”についておなじような論文をほとんど同時に出版した時のような重複をして貴重な時間と労力を無駄にしないように致しましょうとのご趣旨だった。

私からの返事に、ハミルトンとデトロイトでの学会をめぐりて上記のような研究発表を用意していること、そしてCOWA (Council of World Archaeology世界考古学協議会)という機関の出している考古学文献集の日本関係の部分を担当していただける国際キリスト教大学のキダー博士のお手伝いをして先土器文化に関する主要文献の解説付き英訳などを行っていることをお知らせした。これを読まれたチャード博士から「私どもの研究題目の選択には何かがあるよ」といわれるようになった。これは、チャード博士自身、土器の始まりに関する報告をモスクワでの学会で報告してきたばかり、そして先土器文化の文献集を岡田淳子・岡田宏明両氏等と準備中なので、数年前の先土器文化の概観にはじまった重複(No.183、第4回で言及)がまたしてもくりかえされているということになった。私も驚いたけれども、言ってみれば日本考古学に関する

新一による捏造事件のはしりで、2000年11月の発覚にいたる事情をご承知の通り。前期旧石器論のみならず、考古学研究全体に大ショックをあたえた。

数少ない発信地が、どちらも当時点での重要な問題に着目しているということかと思われた。

ハミルトンで発表された報告の原稿はぜひ読ませていただきたい、できればウィスコンシン大学出版局から出している*Arctic Anthropology*に掲載させていただきたいとお申し越し。その一方、モスクワでの口頭報告は印刷にさきだって推敲しているところなので、コメントを頂きたいとのことで原稿の交換となった。読み比べてみると、山内・佐藤両氏のシベリアと日本の縄文草創期の対比(No.187、第6回で触れた)に関する批判などについて意見は一致するが、この前の“先土器文化の概要”の場合と同じく、考古学関係の地名の記載、述語の訳し方の違いが目についた。地名の場合は「井島遺跡」のことをIjimaと書いてあってもIshimalになっている、「井島」という漢字が頭にある人には問題ないが、漢字を知らない読者はイジマの他にイシマという遺跡があると思うだろう。いずれにしても地名については土地の人に尋ねればすぐ解決するが、考古学用語に関しては内容を正しく伝えながら述語として使いやすいような訳語を作る必要がある。特にむづかしいのは土器表面の装飾手法に関する言葉だ。たとえば「爪型文土器」。ネイル・インプレスト・ポタリー(nail-impressed pottery)と訳されている場合が多いが、実際の作業に使ったのは爪ではなくて割竹の切口だとされている。それなら「爪型」を直訳してネイル・パターン・インプレスト・ポタリ(nail-pattern impressed pottery)にしてもよいわけだが、長たらくして語呂がよくない。チャード博士とも相談した結果、1964年の*Arctic Anthropology* 2巻2号に所収された拙文では「爪型文」をそのままtsumegata-monとローマ字で表記して、割竹の切口、云々の説明を脚注でつけることにした。「捺糸文」と「押型文」も同様の取り扱いをしている。

これら早期の土器より古い層から出土する土器については問題はなお複雑になる。まず第一に、新しく



▲Chester S. Chard博士 (1915-2002)

登場した土器なので、日本語の名称が調整されておらず、隆帯文、細隆文、隆起線文、細隆起線文、微隆起線文など幾通りかの名称が使われていること。このうち、福井洞穴の細隆文土器と隆帯文土器は別の層位から出土すると報告されているので、土器の違いを区別した名称であることが明らかだが、異なった名称が同模様の土器を指しているらしい場合(例えば福井洞穴II層の細隆文土器と上黒岩IX層の細隆起線文土器)もある。加えて、土器の表面に“隆起”した“線”を作り出した方法について、細い粘土の紐を貼り付けたとする説と土器の表面が柔らかいうちにつまみあげて隆起線を作ったとする考えがあったようだ。多様な訳語のうち、“Applique ware”、“applique design”、“Band-applique”、“Linear-applique pottery”などは前者の貼付け説を反映しており、“raised ribbon ornamentation”、“raised-band decoration”は後者に傾いている。このほか単に叙述的な“linear relief ware”などもあって様々な訳語が氾濫しはじめていた。私自身、ハミルトンでの口頭報告の早稿では“applique ware”と書いていたところ、*Asian Perspective*に出た八幡一郎先生の論文で“raised ribbon ornament”という言葉が使われているのをみて発表の時はそれに追従したが、1964年の*Arctic Anthropology*に印

連載 ◆ 第 9 回 ◆

アルカ通信 No.193 / 2019. 10. 1

9. 学位論文のための資料収集旅行

1960年にトロントに移る前に、ハーヴァード大学人類学科の博士課程の単位を修得していたのだが、その後、子育てやエジプト行きで、学位論文をまとめるにはいたっていなかった。エジプトから戻った翌年の1964年からはトロント大学の非常勤教員として学部の授業を担当する一方、学会で研究発表したり、論文集に投稿したりなどで忙しくなり、学位論文からますます手がはなれることになった。といて、非常勤から専任のルートに移るには博士号が必要なので、1965年の夏休みは学位論文に本腰で取り組むことにした。ハーヴァードでの主任指導教授のモヴィウス先生とも相談した結果、アメリカにいたときやり始めていた新大陸関係の仕事をご破算にして、日本の旧石器文化をテーマとしてやり直すことにした。1949年の岩宿遺跡発掘以来、日本の旧石器文化に関する資料は急速に増加しているが、先々号で触れた通り国外ではまだよく知られていない。年々増えてゆく日本列島の先土器文化と縄文文化への推移に関する資料を広義の人類学の一部としての考古学という北米人類学の枠組

刷された原稿では“linear relief decoration”に変更している。隆起線文系統の土器は、当時としては日本最古、おそらく世界でも最古の土器形式ということだったから、その歴史的重要性も考慮して混乱を導入しないようにしなければということにチャード博士も私も意識していた。この他にも石刃、ナイフ形石器、細石刃の定義、特に幾何形細石器(geometric microliths)という言葉の使い方などについていろいろ議論があったので、1964年11月のアメリカ人類学会の年次大会出席のため私ども一同デトロイトに来る際に話し合いの場所を設けようということになった。「日本考古学関係の訳語に関するカンファレンス」というと大袈裟だが、デトロイトに近いミシガン大学の日本研究所のセミナー室に集まったのはチャード博士と私のほかに、当時ミシガン大学の客員准教授をしていたハルミ・ベフ博士、そしてウィスコンシン大学に研究員として留学中の岡田淳子・宏明ご夫妻、チャード博士の研究助手をしていられた大貫恵美子、小谷凱宣、Richard Morlan 諸氏たちだった。大貫恵美子氏はのちにウィスコンシン大学教授、Emiko Ohnuki-Tierney博士として多くの業績を残された方だが、このころは当大学の院生で、私どもの論議をテープレコーダーから起こして訳語集の草案をつくってくださった。

みにおいて解釈し、英文でまとめてみるということは私の貢献できる仕事かとおもわれた。

それには、日本の各地をまわって出土した遺物やその出土状態を見学・検討し、研究者の方々のご意見を聴かなければならない。そのための研究旅費をカナダ政府の研究助成機関に申請したが、私はすでに博士課程を修了しているの、院生を対象とする奨学金のカテゴリーには入らず、といて博士号をもっていないから、ポストドックの研究員でもないといった中途半端な地位なので、研究旅費がもらえるかどうかあまり期待していなかったところ、出るということになったので、1965年の夏休みに6週間の資料収集旅行を実現できることになった。ちょうどそのころ、夫フィリップがイランで新しいプロジェクトを開始する計画で、7月15日から2ヶ月イランに予備調査のため出かけることになっていた。はじめの計画ではフィリップの留守中に私が5歳の子供を連れて日本へ行くというプランだったのだが、それよりも、フィリップの出かける前に私ひとり研究旅行をしたほうが、仕事もはかどるだろうし、子供にも楽だろうとい



うことで、6月1日から7月半ばまでフィリップと日通いのお手伝いさんにダグラスをあずけて、単身日本にむかった。

大体の旅程は、北海道1週間、本州北部1週間、関東地方2週間、中部地方1週間、中国、四国、九州1週間の目安で、どこで、誰に会って、何を見ればよいかなどについて芹沢長介氏からご教示いただいた。北海道での大きな収穫はウィスコンシンからもどられた吉崎昌一氏を函館博物館に何度かおたずねして、白滝、樽岸、札滑、立川などの資料をみせていただき、詳しい説明をうかがえたこと。北大では大場利夫、児玉作左衛門両先生はお留守だったが、北大医学部に保管されている資料を児玉名誉教授の令息の児玉譲次助手のお世話で観察させていただいた。

東北地方で、ゆっくりと時間をとったのはもちろん東北大学所在地の仙台。芹沢氏のご配慮で多くの資料を見せていただき、写真や抜刷を多数頂戴した。そして私が都立大学院生だった頃東大から集中講義に来てくださった石田英一郎先生が東大退官後所属されている日本文化研究所の施設を見学したり、芹沢氏との共著論文を英訳させていただいた中川久夫氏に初めてお目にかかって地質関係のお話をきくなど盛りだくさんの日程だった。

東京では岩宿遺跡発掘に始まる日本列島の旧石器文化研究の中核地となっていた明治大学をおたずねして、1963年にお世話になった杉原、大塚、戸沢諸先生に再びお目にかかり、数多くの重要な資料について勉強させていただいた。そのほか、江坂輝弥先生のところにある四国の上黒岩洞穴の資料をぜひ見てゆくようにと芹沢氏から何度も言われていたので、慶応大学には2度もお邪魔してゆっくり見させていただき、国学院大学では小林達雄氏から伊勢見山などの資料などについてのご意見を伺った。東大では理学部の人類学教室で鈴木尚先生をおたずねして更新世出土の人骨についてお話をうかがったほか、文学部の考古学研究室で当時の若手の考古学者、加藤晋平、藤本強、大井晴男の諸氏と会談する機会があった。

## 連載 ◆ 第10回 ◆

### 10. トロントからモントリオールへ

1965年の7月に私が日本での6週間の資料収集旅行からもどるといれかわりにイランの遺跡の予備調査に出かけたフィリップも9月半ばに戻ってきて新学年がはじまった。フィリップとダグラスは毎朝一緒に家を出て、フィリップはダグラスを幼稚園に届け、その足で大学の研究室にむかう。私は一足遅れて自分の研

究室に出かける。お昼過ぎにお手伝いさんが幼稚園へダグラスを迎えにいったつれて帰り、お掃除などしながら私どもが戻るまでお留守番という日程だった。この日程が落ち着き始めたころ、トロント大学の人類学科の爆発(“Explosion”)と学界で噂された大異変がおこった。それは、永年人類学科長を務められた老教

授が引退されたその後任を学部長が人類学科の教員と相談なしに外部から招聘したことからはじまり、その新学部長のやり方が独断的なのに反対した若手教員のほとんど全員と中堅層の教授数人を含めた教員の半数以上が辞職するという事態だった。当時は戦後のベビーブームの人口層がちょうど大学生になった時期で、これに対処するため北アメリカの大学はどれも拡張していたときだったから、辞職した教員たちが転職先を見つけるのは難しくなかった。だからこそ勇ましく集団辞職などできたわけだが、一方、“爆発”事件の火元だったトロント大学の人類学科は教職陣の大穴を埋めるのが大変だったろうとおもわれる。

フィリップも辞職組の一員だった。彼はフランスでモヴィウス先生のアプリ・パター発掘の助手をしたり、ソリュートレ文化に関する学位論文を書くためにフランスに数年滞在したりしていたから、英語系カナダ人としては珍しくフランス語でも講義ができる人類学者なので、モントリオール大学から“ぜひ来てほしい”とのお誘いがあった。1965/66学年度の終わる6月末に私ども一家はトロント市からモントリオール市に移動することになった。

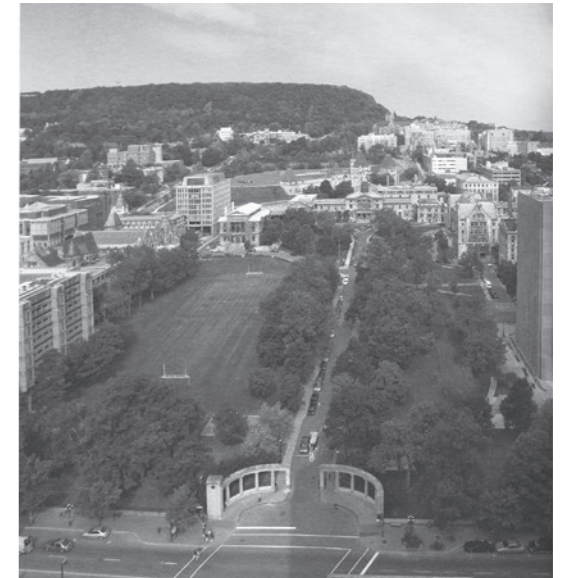
モントリオールは現在はトロントに次ぐカナダで二番目に大きい都市だが、1980年頃まではトロントより人口も多く、経済的にもカナダの中心地だった。日本ならこのような大都市には公立、私立の大学が大小様々あるのが普通だけれども、カナダの制度では規模の大きい大学を少数設置するのが通例だ。トロントの場合、私たちのいた頃は市内にはトロント大学だけしかなく、市の北部郊外に1959年に設立されたヨーク大学が、成長中という状態だった。モントリオールには、19世紀からマウントロイヤルの北斜面にフランス語系のモントリオール大学、南斜面に英語系のマギル大学があった。マギル大学の名称はスコットランド出身の毛皮商人、ジェームス・マギルが1813年の遺言でマウントロイヤル斜面に広がっていた農地に大学を設置することを条件に、かなりの金額をつけてその農場を寄贈したことに由来する。このほかにYMCAが主催していた夜学コースを中核にして1974年に成立したコンコルディア大学(Concordia)に加えて、ケベック大学モントリオール校が1969年に設置されたので、英語とフランス語の大学が現在は2校ずつ存在する。私どもがモントリオールに来た1966年に人類学関係のコースを提供していたのはモントリオール大学とマギル大学だけだった。マギル大学でも独立の人類学科はなくして社会学との合同学科だった。人類学側にはハーヴァード大学院で私共の先輩だった社会人類学者のリチャー

教授が引退されたその後任を学部長が人類学科の教員と相談なしに外部から招聘したことからはじまり、その新学部長のやり方が独断的なのに反対した若手教員のほとんど全員と中堅層の教授数人を含めた教員の半数以上が辞職するという事態だった。当時は戦後のベビーブームの人口層がちょうど大学生になった時期で、これに対処するため北アメリカの大学はどれも拡張していたときだったから、辞職した教員たちが転職先を見つけるのは難しくなかった。だからこそ勇ましく集団辞職などできたわけだが、一方、“爆発”事件の火元だったトロント大学の人類学科は教職陣の大穴を埋めるのが大変だったろうとおもわれる。

教授が引退されたその後任を学部長が人類学科の教員と相談なしに外部から招聘したことからはじまり、その新学部長のやり方が独断的なのに反対した若手教員のほとんど全員と中堅層の教授数人を含めた教員の半数以上が辞職するという事態だった。当時は戦後のベビーブームの人口層がちょうど大学生になった時期で、これに対処するため北アメリカの大学はどれも拡張していたときだったから、辞職した教員たちが転職先を見つけるのは難しくなかった。だからこそ勇ましく集団辞職などできたわけだが、一方、“爆発”事件の火元だったトロント大学の人類学科は教職陣の大穴を埋めるのが大変だったろうとおもわれる。

フィリップも辞職組の一員だった。彼はフランスでモヴィウス先生のアプリ・パター発掘の助手をしたり、ソリュートレ文化に関する学位論文を書くためにフランスに数年滞在したりしていたから、英語系カナダ人としては珍しくフランス語でも講義ができる人類学者なので、モントリオール大学から“ぜひ来てほしい”とのお誘いがあった。1965/66学年度の終わる6月末に私ども一家はトロント市からモントリオール市に移動することになった。

モントリオールは現在はトロントに次ぐカナダで二番目に大きい都市だが、1980年頃まではトロントより人口も多く、経済的にもカナダの中心地だった。日本ならこのような大都市には公立、私立の大学が大小様々あるのが普通だけれども、カナダの制度では規模の大きい大学を少数設置するのが通例だ。トロントの場合、私たちのいた頃は市内にはトロント大学だけしかなく、市の北部郊外に1959年に設立されたヨーク大学が、成長中という状態だった。モントリオールには、19世紀からマウントロイヤルの北斜面にフランス語系のモントリオール大学、南斜面に英語系のマギル大学があった。マギル大学の名称はスコットランド出身の毛皮商人、ジェームス・マギルが1813年の遺言でマウントロイヤル斜面に広がっていた農地に大学を設置することを条件に、かなりの金額をつけてその農場を寄贈したことに由来する。このほかにYMCAが主催していた夜学コースを中核にして1974年に成立したコンコルディア大学(Concordia)に加えて、ケベック大学モントリオール校が1969年に設置されたので、英語とフランス語の大学が現在は2校ずつ存在する。私どもがモントリオールに来た1966年に人類学関係のコースを提供していたのはモントリオール大学とマギル大学だけだった。マギル大学でも独立の人類学科はなくして社会学との合同学科だった。人類学側にはハーヴァード大学院で私共の先輩だった社会人類学者のリチャー



▲McGill大学(筆者撮影)

ド・ソールズベリー(Richard Salisbury)がおり、考古学者としてはのちに考古学の方法論、考古学史に関して多くの業績をのこしたブルース・トリガー(Bruce Trigger)がイェール大学から博士号を得て1964年にマギルに着任されたばかりだった。

モントリオールに移動する前に、マギル大学の人類学科に教職の可能性について問い合わせたところ、1966/67年度は非常勤のポストもないけれども、その翌年度は研究休暇をとる計画をしている同僚がいるので非常勤講師を探すことになると思われるから、モントリオールに着かれたら連絡してくださいとのことだった。実のところ、それは私にとって好都合のタイミングだった。というのは、1966/67年度は教職についてエネルギーを分散させることなく博士論文に専心するための援助金がハーヴァード大学の女子部であるラドクリフ大学からいただけることになったからだ。1965年の夏、日本各地の研究機関を24ヶ所おたずねして、40名の考古学者、4名の形質人類学者と同じく4名の地質学者からお話をうかがい、重要なデータを多量に持ち帰ることができたが、帰国後は講義の準備などに追われて資料の整理が停滞していた。ラドクリフからの援助金のおかげで資料整理に本格的に取り組み、1966年度中に論文に何とか形をつけたいとおもっていた。

昨年夏にお知り合いになった、考古学、形質人類学、地質学の先生方からはその後も文通を通してご親切な御教示をいただいた。特に芹沢長介氏は当時、星野遺跡の再調査などでお忙しいようだったが、福井洞穴の2層、3層、7層、15層や荒屋遺跡の細石器層に関するC<sup>14</sup>測定値など重要な新情報が出ると



すぐにお知らせくださった。また新井房夫先生は前橋泥流堆積物からえられたラジオカーボン測定値から推定される岩宿文化層の年代について説明して下さったし、小片保先生は更新世出土とされる人骨に関する章の草稿を読んで丁寧にコメントして下さった。これらの情報の流れは必ずしも一方交通ではなく、日本の先生方からも「このような石器のヨーロッパでの出土例について知りたい」といったご質問があったり、日本で手に入りにくい文献に関するお問い合わせ

せがあったりした。論文の草稿はかなりすすんだが、地質の章だけで100頁近くになってしまい、この分だと全体は1000頁になるのではないかと、これをどうやって短縮しようかと思案していたところへ、マギル大学から連絡があり、1967/68年度の冬学期に非常勤講師として文化人類学入門の講義を受け持ってほしいというお話があった。こうしてマギル大学との長い付き合いがはじまったが、学位論文の進行はまたしても遅れることになった。

連載 ◆ 第 11 回 ◆

アルカ通信 No.197 / 2020. 2. 1

11. 太平洋学術会議と国際人類学民族学会議

1966年の8月末から9月始めにかけて第11回太平洋学術会議(Pacific Science Congress)が東京と京都で開催されることになっていた。これを目指して来日する機会に日本の旧石器のことをいろいろ知りたいという連絡をレニングラードの考古学研究所、旧石器部門のボリスコフスキー(Pavel I. Boriskovsky)教授から頂いた。実はわたくしもこの大会に参加するのを楽しみにしており、その際に日本の先生方から新しい資料に関する情報を教えていただいたり、遺跡や遺物を見せていただくのを期待していたのだが、前回で述べたような事情で、トロント大学とのコネが春学期末でできてしまうので、同大学から旅費援助をもらう可能

性はなくなったし、いずれにしても1966年の夏は引越して忙しいことになったので、太平洋学術会議出席は見送ることになった。ボリスコフスキー教授にはその旨おつたえして、日本の旧石器のことなら芹沢長介氏にぜひお会いになるようにお勧めし、芹沢氏にもお知らせしたら、連絡がついたことをどちらも大変喜ばれたようだった。

この第11回太平洋学術会議はそれまでに日本で開催された学術会議としては最大の集会だったとサイエンス誌1966年12月6日号に報告されている。参加者総数6000名、うち国外82国からの参加者2200名で、考古学関係の学者も世界各国から多数参加されたようだった。芹沢長介氏から会議後にいただいた書簡によると、いろいろな方にお目にかかれて、大変有益だったとのことだ。前述のボリスコフスキー教授、第8回で言及したウイスコンシン大学のチェスター・チャード博士とその門下生のビル・アーヴィング(William Irving)や、リチャード・モーラン(Richard Morlan)とヴァルダ・モーラン(Valda Morlan)夫妻たち、そしてオーストラリアから来られたマッカーシー(Fred McCarthy)、マルヴァニー(John Mulvaney)氏たちを東京鎌田の芹沢宅に招かれてビールなど飲みながら賑やかに懇談されたとのこと。そして、その数日後はエモリー(Kenneth P. Emory)、シャトラー(Richard Shutler, Jr.)などハワイ関係の考古学者12名ばかりが仙台の東北大学の研究室をお訪ねして石器類を見学して行かれたとのこと、太平洋学術会議は考古学にとっても国際的な情報交流の場として有効だったようだ。

そのような情報交流の場に同席できなかったのは残念だったが、2年後の1968年に9月3日から10日までやはり東京と京都で開かれた第8回国際人類学・民族学会議にはウェンナー・グレン(Wenner Gren)財団から旅費をいただいて参加することができた。私は8月

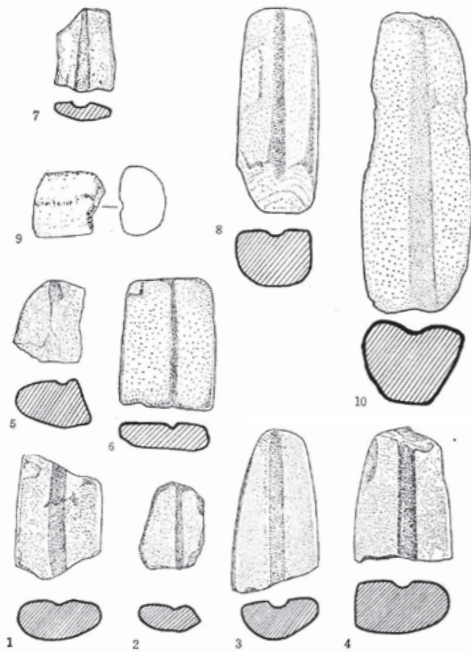


図4 日本発見の矢柄研磨器 1. 5. 岐阜県花ノ部, 6. 岐阜県中野, 7. 山形県一ノ沢, 8. 山形県松沢, 9. 10. 北海道東路路貝塚。縮尺1~8, 10: (1/4); 9: (1/4)

▲日本出土の矢柄研磨器  
出典: 『日本民族と南方文化』P77,  
金関丈夫博士古稀記念委員会編(平凡社/1968)

28日に東京に着き、会議前に仙台の芹沢氏をお訪ねした。新大陸の先史時代研究で有名なウォーミングトン(H. Marie Wormington)博士と前述のリチャード・シャトラーが9月1日は一日中仙台の芹沢氏の研究室にこられたので、日本の旧石器の実物を目の前にしながら、アメリカやオセアニアの先史時代遺物との相似と相違についてのご意見を伺うことができた。

東京でのセッションで私は「ユーラシア北部と新大陸との先史時代における文化交流の視点からみた日本の旧石器文化」と題する発表をした。ICUのキダー先生と京都大学の樋口隆康先生が座長を務められたこのセッションでは、東大の赤沢威と渡辺仁両氏による魚骨の研究法についての発表があり、トロント大学のビル・ハーリー(William Hurley)が石器表面に見られる縄のねじり方の比較研究法が北米と日本でちがうことを指摘し、ハワイ大学のリチャード・ピアソン(Richard Pearson)が韓国の考古学者イム氏(Hyo-Jai Im)らと共同で研究し始めた済州島の文化交流における重要性を論じ、そして韓国の研究者数名が研究発表されたほか、山内清男先生が金関丈夫博士古稀記念論文集(1968)に寄稿された力作の一部を発表された。「世界の先史時代における矢柄研磨器と縄文年代論」と題する山内氏の発表の趣旨は縄文草創期遺跡から出土する矢柄研磨器がユーラシアで初めてみられるのは2500BC頃だから、縄文時代の開始はそれを遡ることはあるまいということで、第6回で触れた植刃論と同様の論旨だ。

私はこのほかに「ユーラシア北部と北米大陸北部との先史時代における文化交流」というテーマのシンポジウムで「日本の旧石器文化編年とアジア大陸との関係」と題した芹沢氏のペーパーを代読し、質疑応答に当たっては通訳を務めた。チャード博士を座長としたこのシンポジウムにはロシアからオクラドニコフやヴァシリエフスキー(R. S. Vasilievsky)、そ

連載 ◆ 第 12 回 ◆

アルカ通信 No.199 / 2020. 4. 1

12. マギル大学：人類学科と東アジア研究センター

1968年9月10日に京都で終了した第8回国際人類学・民族学会議からモントリオールに戻ったときはすでに新学年がはじまっており、息をつく暇もなく新任客員助教授としての授業にのぞむことになった。実は会議に出かける前の春学期にハーヴァード大学での先輩のソールスベリー博士担当のコースの一部を代講していたが、この度は研究休暇で不在となるブルース・トリガー博士担当のコースを代講するフルタイ

れにカムチャッカ研究者のディコフ(N. N. Dikov)が参加しており、アメリカからはミシガン大学の重鎮、ジェームス・グリフィン、デンマークからヘルガ・ラーセン(Helga Larsen)、そしてカナダのチャールズ・ボーデン(Charles Borden)やビル・アーヴィングが発表しており、テーマにふさわしい国際的な議論の場となった。

この会議を回顧して、日本大学の金沢栄作博士は次のようにのべている。「この会議は敗戦の混乱から復興し、研究活動や国際活動を開始した日本の人類学者達の献身的な努力により運営されたが、学問の内容的にも、また会場や接待などの運営面でも高い国際評価を受けた」(Anthropological Science, vol.116, p.55, 2008)。運営面に関する国際評価については私自身の記憶を付け加えておきたい。この会議が開催された1968年の夏は「安田講堂事件」など、全共闘運動が継続中で、予定されていた会場へのアクセスが不安定になったために、急に会場を変更することがあったりしたが、そういった緊急措置がまことにスムーズに執行されていたのについて外国から来ていた参加者が感心してコメントされていたのをおぼえている。

もうひとつ付けくわえると、この会議は企画委員長を務められた岡正雄先生にとっても多年の夢が実現されたということではなかったかとおもう。この「履歴書」の第1回でご紹介したように、岡先生は戦前にウィーンで民族学を勉強され、人類諸科学と連結した民族学を日本に導入することに務められた方で、東京都立大学社会学教室の主任教授でいられたとき助手補に採用して下さったのが私の文化人類学入門のいとぐちになったといういきさつもある。会議中はお忙しくてお話しする機会はなかったが、たまたま廊下で、お会いした際に第8回国際人類学・民族学会議のご成功についてお祝いを申し上げた。

ムの客員教員として、「人類学入門」(Introduction to Anthropology)のコースと「世界の先史文化」(World Prehistory)と題するコースを受け持つことになった。その後、人類学科が社会学から独立した1970年に、正規教員となり、2003年12月に引退するまで、東アジア、特に日本の先史考古学、その延長として、北東アジアから北米への人類拡散の形跡をたどることなどに焦点を置いた研究と学生の指導に従事した。



## 13. カリコ・カンファレンス(1970)とモントリオール・カンファレンス(1973)

1970年の初夏6月にカリフォルニアのサンバーナーデノ郡立博物館長から思いがけない招待状をいただいた。10月22-25日に同博物館、ペンシルヴァニア大学博物館、L.S.B.リーキー財団の共催で、カリコ遺跡出土の遺物の性格と出土状況に関するカンファレンスを開催しますのでご出席いただけますでしょうかという趣旨だった。リーキー財団の「リーキー」はアフリカのオールドヴァイ渓谷での発掘で有名なルイス・リーキー博士、カリコ遺跡はカリフォルニア州東部にあるモハーヴェ砂漠内の丘陵にある遺跡でサンバーナーデノ博物館のルース・シンプソンが1950年代以来調査していたところ。50,000年以前とされる地層から石器と思われる遺物が多数出土した。アメリカ大陸の最初の住民は約12,000年前にクロヴィス型尖頭器を北米各地に広めた人達だったというのが「定説」になりつつあった当時、新大陸への人類移住はそれよりもっと古いことを示す証拠として挙げられた遺跡の一つだった。リーキーはシンプソンの持参した遺物の一部をみて「これはイケる」と思われたらしく、ナショナル・ジオグラフィック協会から資金を得て、1964年から1972年に亡くなるまで発掘調査に従事された。

手元にある名簿によるとカンファレンスの参加者は同伴者も含めて138名となっているが、私の記憶では会場に集まった人数はそれよりずっと多かったと思う。10月22日夕刻のレジストレーションとカクテルにはじまり、続いて晩餐会とリーキー博士による開会の辞、翌23日はバスツアーで遺跡および遺跡付近の地形の見学をした。24日の午前中は、リーキー、シンプソン、その他関係者による説明、午後は博物館でテーブルに並べられた遺物や関係資料を考察し、そして最終日の25日は午前中いっぱい、総合的議論に充てるという日程だった。最終日の議論の議長をされたのは古人類学者として著名なカリフォルニア大学バークレー校のクラーク・ハウエルで、活発な議論が展開した。カリコの遺物、遺跡に関する論点は日本の「前期旧石器問題」と同様、出土遺物はヒトの作ったものかどうかということ、その出土状況、地質年代の信憑性だった。会場での意見は自然力による破砕だろうという方向に動いていた。会場からホテルに戻るバスの中で隣席のチェスター・チャード博士と「人工品ならパターンがあるはずなのに、それがなくてバラバラだね」といった感想を交わしていた。バスを降りて歩いているときにリーキー博士につかまって「日本の石器と比べてどう思

う?」というような質問をされた。大先生を相手に反論を展開する用意はなかったのも、何とか言葉を濁して草々に逃げたのだと思う。リーキーの没後もボランティアによる発掘は続いているようだが、最近の教科書類をめぐって見たところカリコ遺跡は言及されていないのがほとんどだ。

3年後の1973年には私がささやかなカンファレンスを主催することになった。それは1973年の9月1-8日にシカゴで開かれる第9回国際人類学民族学会議に先立って一連のプレ・コンGRESS・カンファレンスを設けようというコンGRESS委員長ソル・タックスの意向をうけて、モントリオールで東アジアの前期旧石器文化に関するカンファレンスをするを計画し、一年前の1972年夏ころから、資金を申請したり、参加者に連絡をとったりしはじめた。

プレ・コンGRESS・カンファレンスの目的は、近年蓄積した新資料、それに基づいた新しい観点を15分ほどの口頭発表で言いっぱなしにしないで、詳しく検討・論議する場を設けようということなので、現在アジア各地で活躍中の20名ばかりの研究者に発表原稿をあらかじめお送りいただくことをお願いした。集まった原稿をコピーして、カンファレンス前に参加者全員に配布し、質問やコメントを用意していただくという構想だった。発表者のほかに、アジアの外から見た感想を聴くために、旧石器の型式学的研究で有名なフランソワ・ポルドをフランスからお招きし、私の夫フィリップ・スミスやハーヴァードで院生仲間だったアラン・ブライヤンやビル・アーヴィングなど新大陸の石器時代早期を扱っている人たちにも参加してもらった。テーブルコーダやスライドプロジェクターの操作係として当時13歳の息子ダグラスを動員した。

カナダ政府の人文系研究助成機関であるカナダ・カウンセルとマギル大学から資金が出たので、シカゴ大会直前の8月28日から31日までマギル大学を会場としてカンファレンスを開催した。第一日はジャワ人関係の論考にあて、午前中はインドネシアから来られたT.ヤコブ博士による人骨出土層の年代測定結果の報告とコーネル大学のトム・ハリソン氏のボルネオと周辺諸島における旧石器研究の報告、なかでもサラワクのニア洞窟でサビエンス人骨が出土したとされる層の約4万年というC<sup>14</sup>年代が論議をよんだ。午後は原人にかかわる文化遺物を戦前から手にかけておられたG.H.R.vonケーニヒスヴァルト博士の論考と1972年から

「人類学入門」は広義の人類学の概観で、最初の秋学期は霊長類の進化からはじまって、化石人類・石器文化の発展と拡散、旧石器・新石器時代を経て古代国家の出現、歴史時代のはじまりまでを扱い、冬休暇後の春学期には世界各地の民族の文化と社会について社会人類学の観点から概観するコースだった。これは人類学を専攻する学生には必須科目だが、人類学以外の学科を専攻する学生たちも人文系、理科学系、にかかわらず一般教養の選択科目として登録するので、正確な記録は見つからないけれども聴講者は数百名だったと思う。大講堂にあふれるような聴衆を相手に講義するのは新米の教員ではなく、学生相手の講演になれた大先生の方が適当だとおもわれるけれども、何百名もの登録となると講義や採点ばかりでなく、事務的な仕事にも時間がかかるし、人類学の初歩的な概説は多くの研究者にとって魅力的なトピックではないということもあって、大先生がたは「人類学入門」のような大型コースを回避されるので、新任の教員の受け持ちになることが多い。筆者自身、数年後に若手の同僚が赴任してくると、そちらにお譲りした。

1968年はマギル大学理事会が東アジア研究センターの設立を決議するなど、本学で東アジアに関する研究と教育が正式に発足した年だった。その背景としては、1964年のオリンピック、新幹線開通などにみられる戦後日本の復興ぶりが国際的に注目されたこと、中国については1965年から展開した文化大革命、1970年に成立したカナダと中国との外交再開への交渉過程など、1960年代はカナダ人の東アジアに関する関心が高まりつつあった。マギル大学はすでに1930年代に中国文明に関するコースを設けていたということで、この分野については先駆者だとされているが、マギルと中国との関係についてはノーマン・ベチューン(Norman Bethune)を中介とする縁がある。トロント出身の医師ベチューンは1920年代の末から1930年代の半ばにかけてマギル大学のロイヤル・ヴィクトリア病院で医療技術を学び、その後も同病院で技術・器具の改良と開発に従事していた。1935年にカナダ共産党に入党し、1938年には中国にわたって負傷兵や土地の住民の治療にたずさわった。その医療活動中に指を切ったことから敗血症に罹って1939年に延安で亡くなった。彼の業績を毛沢東自身が讃頌した甲辞「紀念白求恩」(「ベチューンを記念する」)は文化大革命の時期に広く読まれたとのことだ。モントリオールのダウンタウンにはベチューン広場と命名された広場があり、中華人民共和国からモントリオール市に寄贈されたベチューンの像が置かれている。

1960年代には、マギル大学の歴史学科では世界史の一端として「中国と西欧」とか「ソ連と中国」といったコースを提供しはじめた。これらが大変好評だったので、1960年代の後半には東アジア関係の部門を強化するために、歴史学科の教員陣に中国史専攻の教員2名と日本史の専攻者1名を加えることになった。日本史担当の助教授としてお迎えしたのは、カリフォルニア大学のバークレー校で博士課程を修了されたのちペンシルベニア州のバックネル大学で講師をしていられた馬場伸也氏で、のちに阪大法学部教授、国際政治学者として多くの業績を残された方だった。1960年代末には、マギル大学の人類学科に1968年に加わった筆者の他にも英文学科、独文学科、美術学科、経済学科、政治学科、生化学などに、東アジアの文化・社会をそれぞれの立場から研究対象としている教員やアジアの研究者との交流に関心のある科学者などが、かなり増えていた。これらの研究者の意図を助成するために文理学部内に「東洋文化委員会」が創設され、これが何度かの改名を経て、「東アジア研究諮問委員会」として継続している。そのいっぽう、先述の通り、一段上の大学全体のレベルで、評議員会と理事会の決議によって東アジア研究センター(Centre for East Asian Studies)が正式に発足し、アジア研究に不可欠な言語能力を養成するために東アジア言語・文学科(Department of East Asian Languages and Literatures)も設置された。

1968年12月には新設の東アジア研究センターの運営委員会の第一回のミーティングが開かれ、東アジア研究プログラムの構想を練るための委員会を作ることがきまって、私もその委員会に加わるよう招待された。これがマギル大学における東アジア研究へのかわりのはじまりだった。これより何年か先には私自身が、東アジア研究センター長、東アジア言語・文学科長を務めることになる。



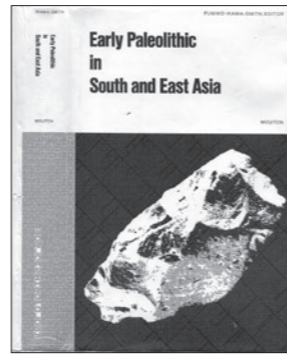
▲モントリオール市、ベチューン広場のベチューン像  
撮影者:フィリップ・スミス



「パジタン文化」に取り組み始めたオランダの若手の研究者J.G.バートラ博士による概報をきいた。このように午前・午後各2点づつ程度のペースでインド半島から東南アジアの大陸部をカバーしてから北上し、中国、韓国、日本列島、沿海州での研究現状を考察し、さらにアジアの前期旧石器群が新大陸への人類移住に持つ意味にも触れることになった。日本列島については芹沢長介氏から原稿をいただいていたが、ご本人はおいでになれなかったところ、シカゴ大会に参加ご予約の大井晴男氏と吉崎昌一氏に、参加していただいて、芹沢氏とは違った見解をのべていただいたのは有意義だったとおもう。最後の日、31日は午前中いっぱいを総括的議論にあてた。主な論点はアジアの前期旧石器文化をどのように性格つけるかということで、意見さまざま。特にボルド博士のご発言が議論を活気あるものとした。

カンファレンスのために用意していただいた原稿をもとにした論文は、第9回国際人類学民族学会議関係の論文を収録したWorld Anthropologyという一連

の論文集の一巻としてオランダのMouton社から出版されることになっていた。私どものカンファレンスの論文集はEarly Palaeolithic in South and East Asiaというタイトルになる予定で、ボルド博士にはその冒頭に「はじめに」(“Forward”)と題した短文を書いていただいた。活発な議論の一部は私が編者としての「緒言」の中に書き込んだ。モヴィウス・ライン論の発端となったモヴィウス先生ご自身は、カンファレンスに出席できないことを大変残念がっていられたが、原稿は全部読んでくださったようで、その感想をまとめていただいたのを、「結語」という形で論文集の巻末に収録させていただいた。論文集はMouton社の持ち主が変わったりしたことですいぶん遅れて5年後の1978年に出版された。



## 連載 ◆ 第14回 ◆

アルカ通信 No.203 / 2020. 8. 1

### 14. 学位論文修了とガンジダレ遺跡調査

1973年はずいぶん忙しい年だった。前回で触れたモンリオールでのカンファレンスは8月28日から31日まで。それに先立って、発表論文を集めて全員に配布するについて、今ならそのような配布はコンピューターのボタンをいくつか押せばできてしまうところだけれど、当時は、世界各地から送ってくださった原稿をガリ版に謄写して20部ほどのコピーを作り、それをまた一つずつ封筒に入れて世界各地の参加者に航空便でお送りするという手配が必要だった。それはともかく、一番大変だったのは観光シーズン真っ盛りのモンリオールで、ダウンタウンにあるマギル大学の付近に、参加者とその同伴者に滞在していただくホテルの部屋を確保することだった。

そのような手配と交渉で忙しいいっぽう1973年の春から初夏にかけては私自身の学位論文の最終段階でもあった。1970年以来フルタイムの助教授として授業を受け持ち、委員会の事務などもして人類学科にとっては便利な人間になりつつあったようだが、それらの仕事におわって学位論文の終結が遅れているので、助教授は通常3年契約で任命されるころ、一年ごとの臨時的な契約更新をくりかえしてきた。これを正常化するために、カンファレンスの事前準備と、事後整理に平行して、学位論文の締め括りをするに決めた。

1965年に論文のテーマを設定した際の意図は、日本の先石器文化を、総合人類学の一部としての考古学という枠組みにおいて解釈してみようというつもりだった。いざとりかかってみると、毎年増加してゆく資料を全部扱うのは無理なので、「前期」旧石器にしぼることにしたが、それでも「日本の前期旧石器文化の検討」(Early Palaeolithic Cultures of Japan: An Appraisal)と題する論文は700頁近くになりつつあった。

8月末にカンファレンスが始まる前に末尾につける要約の章以外はモヴィウス先生に読んでいただいていた。最後の章をモヴィウス先生に送ったのはカンファレンスの論集に「結語」を書いていただくために発表された一連の原稿をお送りしたときだった。ハーヴァードの制度では博士論文の指導・審査委員会は通常3名、私の場合は主査のモヴィウス先生に加えて、中近東の先史時代を研究してられるランバーグ・カーロフスキー博士(C. C. Lamberg-Karlovsky)とヨーロッパの新石器時代をご研究中のトリンガム博士(Ruth E. Tringham)だった。1973年の秋、私がカンファレンスの原稿集の編集をしているときに審査委員の先生方は私の論文を読んでいただいていたようで、1973年の暮れには審査通過との通知をいただき、翌74年6月の学年末に学位を授与された。

学位の件も決着したので、1974年の夏は、夫フィリップが1965年以来調査しているイランのガンジダレ遺跡の発掘に参加することにした。ガンジダレはイラン西部のザグロス山脈中の小さい谷間に散在する遺跡の一つで海拔1400mの地点にあり、直径40メートル、高さ7メートルの小さい塚になっている。1965年の試掘以来、1967、69、71年に発掘調査をしており、この度が4回目、そして最後の発掘調査となった。これまでの調査で上からA、B、C、D、Eと5枚の文化層が確認されており、放射性炭素による年代測定によればE層からA層までBC8000年頃からBC7000年頃まで約千年間の生活の跡をとどめている。



▲ガンジダレD文化層 (BC7500年頃) 出土のツボ

フィリップは、調査開始前に首都テヘランにあるイランの考古学センターで打ち合わせや交渉をし、その後現地で発掘作業員や宿舎を調達したりしなければならぬので、5月半ばにイランにむかった。私と息子ダグラスは一月おくれて、6月13日にテヘラン着、空港にフィリップの知り合いが手配してくれた車が待っていてくれたのに乗って約10時間、うねうねした山道を通って、調査団が滞在しているハーシンという町に到着した。調査団といってもこじんまりした構成で、フィリップとイラン考古学センター派遣の考古学者に加えて、カナダ、アメリカ、デンマークから参加した大学院生4名、それに私とダグラスが合流した。私は出土品を登録、保管する資料室の責任者、14歳のダグラスは非公式カメラマンを務める。そして周辺の農村から雇った約20名の作業員。夏は農閑期なので、遺跡での仕事は大歓迎で、“わたしも雇ってください”、“うちの息子も使って

## 連載 ◆ 第15回 ◆

アルカ通信 No.205 / 2020. 10. 1

### 15. 再び資料収集旅行

1974年の夏、夫フィリップのガンジダレ遺跡の第4次発掘調査に参加してイランからもどったのは9月初旬。新学期開始に備えて忙しい時期なのだが、この年は、講義の準備ではなく、荷解きをするのと同時に、次ぎの旅行のための荷作りをするようになった。というのは、マギル大学に就職してからすでに7年になるので、

ください”との競争が毎度大変だとのことだ。

遺跡は宿舎から車で約20分くらいのところにある。日中は大変暑くなるので、フィリップと院生たちは早朝6時ごろに宿舎を出て、涼しいあいだに作業をし、午後2時ごろには宿舎にもどる。その後は出土遺物の整理やフィールドノート記入に過ごすという日課だった。私はほとんど毎日資料室で出土品の分類、登録に過ごしたが、たまにはフィールドの状況を見に行ったり、時には人骨を取り上げたりするのに動員されることもあった。

5枚の文化層のうち、上の4枚、A、B、C、Dの文化層は日干し煉瓦を積み上げた家屋からなっているが、一番下のE層には建造物は全くみられない。定住生活以前の狩猟・採集民の残したものとおもわれるが、石器の作り方などについてはE層からD層にかけて連続性がみられるので、居住集団が入れ替わったとはおもわれない。それに、非常に少数ながら、土器のかけらと土偶数点も出土している。土器に関しては、その上のD層から精巧な土製品が多数出土している。ここに示すような小型のツボやハチの他、高さ1メートル前後の大型の容器がいくつか壁にもたれかかった形で残っていた。

植物遺存体はほとんど皆無でコムギ、オオムギと豆類が少しばかり採取された程度だが、動物の骨は、シカ、ウシ、ブタ、鳥類など5万点以上、その中でも多いのはヤギで80%をしめる。当時コロンビア大学の院生として発掘に参加したブライアン・ヘス(Brian Hesse)は、この獣骨群を学位論文の対象として分析した。彼によると、E層出土のヤギの骨は性別・年齢の分布からみて狩猟の結果得られたものと考えられるのにたいして、D層ではで18ヶ月くらいのオスの骨が圧倒的に多くなる。これは、家畜化の方向に踏みだしたことを示しているとのこと。日干し煉瓦にヤギの足跡と思われるのが残っているのも、住居の近くをヤギが歩き回っていたことを示している。ガンジダレ遺跡は食料生産文化としての新石器時代の始まりを示唆する遺跡として興味深い。



すること。『日本の前期旧石器文化の検討』と題する論文で学位をいただいたばかりだったが、すでに新しい遺物群や解釈が通報されているほか、書きながらも層位や遺物の性格について疑問のある点がいくつかあったので、論文の一部または全部を出版したいというお申し出に応じる前に、確かめたいと思っていた。

私の留守中はお手伝いさんに週2回、掃除や洗濯をしに来てもらうのはいつも通りだが、食事の準備に関してはフィリップは全くお手上げなので、14歳の息子ダグラスの役目になった。手元に残っている当時の通信から見たところ、ダグラスは食事に関する責任者の役を結構楽しんでいたらしい。といっても私が出発前にシチュウ、カレー、スープなどを多量に作り、一食分用の容器にいれて、冷凍庫に詰め込んできたので、それを解凍して食卓に出すのが主な仕事だったとおもうが、ときには「今夜はローストビーフだ」という文面がある。本当に生肉をオヴンに入れて焼いたのか、すでに料理してあるものを買ってきたのかは不明。

一方、私は日本時間の16日の夜に到着してから45日間、北海道から九州の宮崎まで、新幹線、在来線、飛行機、バスで駆け回っていた。まず東京で一晩過ごしてから堺市にあった父の家に移り、そこを本拠にして、各地の研究者の方々に連絡をとって旅程を整備した後、京都に出て、平安博物館所蔵の丹生遺跡の資料の一部を計測させていただいたり、角田文衛博士から本遺跡に関する最近のご意見をうかがったりした。数日後に千葉県茂原市の妹宅に移って、外房線で東京に通い、明治大学、立教大学、東大、ICU所蔵の資料を見せていただいた。芹沢長介、杉原壮介、相沢忠洋、鈴木正男の諸氏のお世話になり、小林達雄氏宅では小田静夫、チャールズ・キーリー両氏や学生たちと賑やかに会談した。

29日以降は数日間、東北大学にある遺物をゆっくり観察させていただくつもりだったので東北本線で仙台にでかけた。芹沢長介氏が授業を終えられるのを待って計画をお話したら、実はフランスからこられたアンリ・ド・リュムレー(Henry de Lumley)氏に翌日東京で会うことになっているので、一緒に行ってくれないかとのこと。東北新幹線が開通する前だから、長時間かかって仙台に着いたところなので、ややがっかりしたけれども、芹沢さんのお申し出をお断りすることもできず、翌日同行させていただくことになった。その夜は仙台の芹沢宅に泊めていただき、翌日は蒲田の芹沢邸にお泊り下さいといただく。東京への帰路の車内では芹沢さんとお話しがはずみ、昨日とちがって、疲れも感じず、非常に有益な時間を過ごさせてい

ただいた。ド・リュムレーはヨーロッパ最古級の原人化石を出土したアラゴ洞窟などの発掘で有名な考古学者。30日の夕刻、シャブシャブの夕食を共にしたというメモが残っているが、どのような話題が出たのかについては記憶がない。

11月3日に再び仙台に来て、草水台出土の石器、剥片、石核について属性分析を適用する準備にとりかかった。これには計測を手伝ってもらう人が必要なので、だれかを推薦してくださるよう芹沢さんをお願いしてあった。これに応じて来てくれたのが、後に奈良文化財研究所の埋蔵文化財センターに所属して環境考古学、特に動物考古学で成果をあげられた、松井章氏。当時東北大学の学部生だった松井さんは、私がどんなことをしているのか知りたかったので、お手伝いさせていただくことにしたと言っていた。当時のことで当然ながら、ニューアーケオロジーにも大変関心をお持ちだったようだ。芹沢さんからのご依頼で、北米考古学の動向などについて学生向きの講演をした際に、ルイス・ビンフォードが「人類学としての考古学」(Archaeology as Anthropology, 1962)で、「何が起こったか」(“What happened”)だけでなく、“Why” “なぜ” “How?”どのようにして”起ったのかを探求すべきだ”といっていることを紹介したのに非常に感銘された。何年か後に言うてくださった。

石器の計測を松井さんをお願いしておいて、私は11月9-10日に考古学協会の1974年度大会が開催される名古屋に行った。名古屋滞在中は紅村弘氏ご夫妻に大変お世話になって、加生沢出土の遺物を調べさせていただいたり、多治見遺跡へ連れて行っていただいたりした。再び仙台にもどって遺物の計測、撮影に数日過ごしたのち、16日は芹沢さんのご案内で山形まで日帰り旅行。加藤稔氏が発掘・蒐集された、上屋地、明神山、庚申山出土の遺物を見せていただいた。

11月18日には、向山、大久保、星野、福井15層、岩宿0など多数の遺物を勉強させていただいた仙台にサヨナラをして札幌に向かった。フォード大統領が来日中だったので飛行場での検察が厳しくてモタモタしたが、無事に札幌着。札幌に来た主な理由は前年の1972年に発見され、2万年以上のC<sup>14</sup>年代の出ている祝梅三角山の資料を実見することで、調査担当者は吉崎昌一氏なのだけれど、実際には岡田宏明氏に札幌滞在中大変お世話になった。

翌19日に札幌をたって東京周辺と大阪付近でそれぞれ数日間過ごしてから24日に米子に飛んだ。山口大学の小野忠熙博士が米子空港でまで来てくださ

て、宍道湖付近の遺跡をご案内いただき、続いて山口市周辺の遺跡へも連れて行って下さった。山口から27日にバスで福岡に出て大宰府博物館、佐賀大学を尋ねたあと、草水台の資料を見せていただくために別府に向かう。その目的は果たせなかったが、賀川光夫先生が草水台遺跡に連れて行って下さったので、ミカン畑になっている遺跡周辺の景観を経験することができた。29日の夜遅くに別府から宮崎に着き、翌日

は南九州短期大学で出羽洞窟出土の遺物を見せて頂いた。12月1日に堺の家にもどって帰宅の準備をしながら、日本列島駆け回り旅行の最終日に鳥打峠遺跡で蒐集された遺物を見せていただくために新幹線ヒカリ号で岡山まででかけるなどしたが、12月4日に無事帰国。フィリップとダグラスに歓声で迎えてもらった。

## 連載 ◆ 第16回 ◆

アルカ通信 No.207 / 2020. 12. 1

### 16.1. 北米考古学の動向：ニューアーケオロジーについて

北海道から九州までを前期旧石器関係の資料収集の目的で駆け巡った1974年の秋はルイス・ビンフォードの「人類学としての考古学」(Archaeology as Anthropology, 1962)で始まったニューアーケオロジーの余波が続いていて、行く先々でいわゆるプロセス学派の論旨、現状が話題になった。その数年前に、“1971年の動向”を集録した『考古学ジャーナル』第68号に「欧米の動向」として、ニューアーケオロジーの主唱者たちの標榜する考古学の目的と方法、その現状などに焦点をあてた短文を発表していたからかもしれない。京都大学をおたずねしたときは、当時京大の助手をしておられた都出比呂志氏とロングエーカー(William A. Longacre)やヒル(James N. Hill)などが合衆国西南地方の考古学遺物から親族組織を復元をした論文の問題点などについてお話したことをおぼえている。丹生遺物を見せていただくために平安博物館にうかがったときも、角田文衛先生からニューアーケオロジーについて講演してほしいといったお話があったけれども、時間の都合がつかず、実際に講演をしたのは11月半ばにしばらく滞在した仙台で東北大学の学生を対象に話したのにとどまった。芹沢先生

### 16.2. 井川定慶喜寿記念会

資料収集旅行に出かけた1974年の秋には、たまたま私の父、井川定慶の喜寿記念祝賀会が計画されていたので、旧石器の勉強から一日割愛してこれに参加した。大阪府羽衣町のホテルで開催された祝賀会の焦点は喜寿記念会出版の『日本文化と浄土教論攷』。知人・同僚・先輩・後輩の方々の寄稿された論文やエッセイ230点、998頁に加えて、定慶自身の短文・論評21点を再録、全部で1341頁に上る大巻だった。父は『法然上人絵伝の研究』で京都大学から旧制の博士号を授与された仏教史学者なので、寄稿論

のご指示で、近東での新石器時代の始まりについて当年夏のガンジダレ遺跡での発掘経験など組み込んでお話する計画だったけれども、北米の考古学者たちの研究動向として、新石器時代の始まりについても、それがいつ、どこで始まったかだけでなく、なぜ、どのようにして進行したかを探求すべきだという主張に言及することになった。これについて松井章さんが大いに同感されたとのこと前号に触れた。松井さんはその後まもなく1977年にネブラスカ大学に留学されて、ピーター・ブリード教授らのご指導で環境考古学を研修された。同じく東北大学出身で現在同大学教授の阿子島香氏はニュー・メキシコ大学の大学院でニューアーケオロジーの大御所のルイス・ビンフォードに師事され、博士号を授与されている。この2年後に麻生優・加藤晋平・藤本強諸氏共編で雄山閣から出版された『日本の旧石器文化』の第5巻(1976)に「旧石器文化研究の方法論 -特にプロセス学派の観点を中心として-」と題して、北米での考古学議論をややまとまったかたちで紹介させていただいているがこれに関する共編者の方々のご相談もこのころに始まったのだと思う。

攷のほとんどは仏教関係の内容だが、それでも、檀原考古学研究所初代所長の末永雅雄博士、思想史学者の石田一良博士、関西大学の綱干善教博士など、考古に関係のあるお名前もちらちらみあたるいっぽう、石田茂作、堂本印象などといった方からも随想文をいただいている。私も仲間に入れていただいて「日本文化の源流と旧石器文化の研究」という小文を提供した。父は3年後に79歳で他界したので、1974年の喜寿記念会に参列できたのは幸いだった。



### 16.3. カナダと日本考古学研究

1974年の年末に帰宅して、家族とクリスマス、お正月を祝うとまもなく、1975年の1月18-20日に開催されるシンポジウムに参加するためオンタリオ州ピーターボロー市にあるトレント大学(Trent University、トロント市所在のUniversity of Torontoとは別の大学)にむかった。トレント大学内に設置される新施設を記念する目的で計画された一連の講演会が、担当者のモーガン・タンプリン助教授のご努力で大変立派なシンポジウムとなった。発表論文は、アジアン・パースペクティブズ誌の日本考古学特集号として(Asian Perspectives、19巻1号、1978)出版されている。まず芹沢長介先生の「日本の石器時代」と題する総観に続いて、私が旧石器時代を概説し、それに対するウィリアム・アービング(William N. Irving)のコメントがあった。次いでリチャード・モーラン(Richard E. Morlan)の楔形石核による細石器技法、ピーター・ブリード(Peter Bleed)の縄文技術文化の伝統と題する論考のあと、北海道でのフィールドワークから戻ったばかりのウィリアム・ハーリー(William M. Hurley)、ギャリー・クロフォード(Gary W. Crawford)等のチームによる渡島半島のハマナスノ遺跡を中心とした研究の現時点における結果の詳しい報告があった。そのあとは弥生文化についてパトリシア・ヒッチンス(Patricia Hitchins)の発表、朝鮮半島との関係についてL・サンプル(L. L. Sample)の考察に続いて中国も含めた東シナ海をめぐる沿岸文化圏についてリチャード・ピアソン(Richard Pearson)が展望した。

“国際的”ともいえる規模のシンポジウムだが、発表者の所属機関をみると、芹沢長介、ピーター・ブリー

ド両先生と当時ノース・カロライナ大学の大学院生だったクロフォード以外はすべてカナダの研究機関に属している。私がモントリオール市のマギル大学、アービング、ハーリー、サンプルはトロント大学、モーランはオタワの国立博物館、ピアソンとヒッチンスはバンクーバー市にあるプリティッシュコロンビア大学所属だった。それは旅費などの費用を節約するために近隣の研究者を意識的に選んだのではなくて当時北アメリカで日本考古学を専攻している考古学者のほとんどがカナダに集中していたからだった。それは北米より視野を広げて世界の英語圏での日本考古学研究についてみても同様だった。この異常ともいえるカナダ集中状態がその後何年か続いていたが、2000年代になって様相が変わりはじめた。ピアソンが2000年にUBCを引退、まもなく私も2003年にマギル大学から引退したのに加えて、国立博物館のモーランが2007年に亡くなった。日本の考古学に関する研究活動と次の世代の研究者養成が継続していたのは、トロント大学、ノース・カロライナ大学で環境考古学を研修されたクロフォード博士が、出身地のトロントにもどられて、日本ばかりでなく、東アジア一帯の先史時代人の植物利用に関する研究を勢力的に遂行されて興味深い結果を得られていたが、同氏も2020年6月末で引退されたときいている。カナダでの日本考古学に関する景観は更にさびしくなることになるが、それはまださきのこと。私が忙しく駆け回った1974-75年度から20世紀の終わりのころまでは、世界の英語圏での日本考古学研究に関してカナダが卓越した地位を占めていたことを記録しておきたい。

太平洋をめぐる地域を主題とした上記のシンポジウムを計画していた。

新大陸への人類移動に関する当時の学会の定説は陸化していたベーリング海峡を経てBP13,000年頃に新大陸に入った人たちが縮小しつつあった氷床の間にできた通路(“Ice-free corridor”)を南下して北米の無氷地帯に達し、マンモスなどの大型動物を狩猟したクロヴィス型尖頭器文化を形成したというシナリオだった。アランはこの「クロヴィスファースト説」に反対した少数派のひとり、2010年になくなるまで、クロヴィスより古い遺跡、遺物を学界に提示するのに専心した。このシンポジウムの意図も、アメリカ両大陸でクロヴィ

ス以前と思われる石器文化の起源が太平洋沿岸地域のどこかにあるのではないかと、太平洋の東岸を見渡して検索してみようという趣旨で、そのためには1973年のモントリオール・カンファレンスのような国際的な討議の場を設けたいと言っていた。

実現したシンポジウムはまさに国際的な規模で、R.ジョーンズ氏のオーストラリアの先史時代概観にはじまって、ジェーン・エイグナー、孫宝基、井川史子がそれぞれ中国、韓国、日本について発表したあと、ロシアからデレヴィアンコが後期更新世のアジアから新大陸への人類移動に関する論考を提出、続いてデイクフによるカムチャッカ半島のウシュキ遺跡発掘の結果の報告、そしてモチャノフがデユクタイ洞窟を含むレナ河上流地方での精力的な調査の現状を報告した。それからアメリカ大陸側に移って、アラスカのDry Creek、カナダ北部のOld CrowにはじまってカリフォルニアのChina Lake、メキシコのTlapacoya、ペルーのLos Taldos洞穴などから得られている最近の資料や年代測定値の報告と議論があった。最後の日にはバンクーバー郊外のサイモンフレイザー大学に全員バスで移動して、同大学の所蔵品や持ち寄った遺物の展示を検討しながら活発な議論がはずんだ。

シンポジウムの目的はベーリング海峡の向こう側にどのような石器製作技術がいつ頃あって、それらがアメリカ大陸の早期石器群とどのように関連するかを解明することだった。これについては日本列島の旧石器時代の資料は大いに貢献できると思う。というのは、日本列島は周辺地域に比べて遺跡の数も多く、しかも遺跡の多くが火山灰との層位関係などを通して年代がかなりはっきりしているからだ。私自身、国際舞台に初登場した1968年の第8回国際人類学・民族学会議で「ユーラシア北部と新大陸との先史時代における文化交流の視点からみた日本の旧石器文化」と題する発表をしたことはすでに触れた(アルカ通信No.197)。その後も同様な趣旨の発表を何度かしており、特に鈴木正男博士の先駆的研究に始まる黒曜石の原産地検索の結果、神津島の黒曜石が本州に3万年以上も前から搬入されていることが明らかになって以来、ベーリング海峡からそう遠くない太平洋沿岸にかなりの航海技術を持った狩猟採集民がいたという指摘してきた。



▲ブライアン編のEarly Man in America from a Circum-Pacific Perspective, 1978より

バンクーバーでの学会が8月29日に終わって月末に帰宅、9月1日から新学年に面したわけだが、この新学年は私にとって新しい経験の始まりだった。というのは私がサバティカルで留守中に、人類学科の同僚が私を人類学科長に選出、それが学部長、理事会の承認を経て9月1日付で着任することになっていたからだ。当時の人類学科の教員数は10名くらいだったと思うが、そのほとんどが私より年功を積んだ人たちだったのに、どうして准教授に昇進したばかりの私を選出したかということ、「女性にもかかわらず」ではなく、「女性だったから」、しかも日本人の女性だったからのようだ。その頃の人類学科の有力な教授陣は日本でもよく知られている考古学者のブルース・トリガー博士のほか、ハーヴァードでの先輩で途上国の発展過程を経済人類学の立場から研究しているリチャード・ソールズベリー博士、これとは対照的にマルキシズムの見地からアフリカの労働者問題を扱っているピーター・グトキンド博士という顔ぶれだった。それぞれ御自分の意見を強力に主張なさる方達だから、社会学から分離したばかりの人類学科の将来などに関する意見がまとまらないのは当然。日本人女性は“おとなしい”はずだから、随意に操れるだろうと各人内心期待して新参の私を学科長に立てることに意見が一致したようだ。その頃は北米でも女性の学科長は少なくて、9月1日に新学年最初の人文学部の学科長会議に主席した際、約20名の学科長のうち女性は私一人だけだったのにおどろいた。大学の管理職は学長以下ほとんどが男性だったころなので、女性を学科長に選出した人類学科は当時としては「進歩的」な姿勢を示したのかもしれない。いずれにしても現在はマギル大学の学長も人文学部長も女性だから時代は変わったものだ。

## 連載 ◆ 第 17 回 ◆

アルカ通信 No.209 / 2021. 2. 1

### 17. 国際会議2件と役職就任の始まり

1975年の夏は旧友アラン・ブライアンのお誘いに応じて「環太平洋の視点からみた新大陸の先史文化」(Early Man in America from a Circum-Pacific Perspective)と題するシンポジウムに参加した。ブライアンはハーヴァードの院生時代からの知り合いで、1957年のワシントン州ブリストラピッツ遺跡の発掘調査で一緒だったことや(アルカ通信No.179)1973年のモントリオール・カンファレンスにはコメンテーターとして参加してもらったことなどすでに触れた(アルカ通信No.201)。1975年当時はカナダ西部のアルバータ大学で教職についており、お隣のプリティッシュコロンビア州で開かれる第13回太平洋学術会議を舞台にして



その後2003年末に引退するまでマギル大学に勤務した35年間の40%に当たる15年間はなんらかの役職を務めることになったが、この人類学科長就任がその始まりだった。お役目を持っているあいだは研究活動や学会出席が制限されることになるが、1975年の秋はノボシビルスクにあるソヴィエト連邦科学アカデミーのシベリア支部で、歴史・哲学・言語学研究所長をし

ていられたA.P.オクラドニコフ博士が計画されていた「シベリアの古代文化と太平洋近隣地域の諸文化との関連」というシンポジウムに予定どおり参加させていただくことになり、10月19日にモントリオールをたち、25日帰国という駆け足のシベリア旅行をした。シベリアは初めてだったし、海外旅行はしばらくできないかもしれないからというつもりでもあった。

連載 ◆ 第 18 回 ◆

アルカ通信 No.211 / 2021. 4. 1

18.1. 第15回太平洋学会議

3年任期ということで引受けた人類学科長のお役目だったが、3年目の終わりが近づいた頃、あともう2年やってくれないかというお話があったのに応じて、結局五年間を学科長室ですごした。1980年の夏に満期解放され、その翌年は研究休暇をいただいて、例によって日本各地を駆け回って出版物をあつめたり、新資料を見せていただいたりした。人類学科長就任中も1978/79年の年末休暇を利用してインドで開催された国際民族学・人類学会 (ICEAS) 第10次大会に参加したり、1979年の夏休みには沿海州のハバロフスクで開かれた第14回太平洋学会議で研究発表をしたりしたが、任期終了後の1983年2月には同学会の第15回大会の一環として計画された“太平洋地域における考古科学”と題するシンポジウムに参加するためニュージーランドまで足をのびた。30分ばかりの研究発表をするのにずいぶん遠いところまで行くんですねと冗談をいわれたが、その理由は、1980年に学術振興会から出版された古文化財編集委員会

編の『考古学・美術史の自然科学的研究』だといってよいだろう。64点の論文を集録した大変立派な620頁の出版物で、Natural Science Approaches in Archaeology and Art Historyという英文のタイトルがついているが、内容については“環境”、“年代”、“生業”、“材料と技術”など7項目の見出しの英訳が列記してあるのみで、論文の英文要旨もついていない。こんなに多数の研究者が日本でどんな仕事をしているのだろうと、外国の研究者にとって興味津津なのは当然だろうとおもわれる。それで私にお誘いがきたわけらしく、それまで行ったことのない南半球に出かける好機会だろうと思ってお引き受けした。といっても、私は自然科学的手法をつかった研究をしているわけではなく、その結果を利用していただいているだけなので、あくまで消費者の立場から見た感想ですとお断りして、私なりの概観を述べさせていただいた。考古資料を対象にした自然科学的研究の“消費者”と“製造者”という言葉が会場で一時流行した。

18.2. マギル大学の東アジア研究センター

1968年に大学理事会の決議によって「東アジア研究センター」が発足し、同時にアジア研究に不可欠な言語能力を養成するために「東アジア言語・文学科」が設置されたことはすでに触れた(12回、No.199)。その際述べたように、マギル大学ではかなり早くから中国関係のコースを歴史学科のカリキュラムの一部として提供していたので、東アジア言語・文学科が発足したばかりの1969-70年度には中国語のコースが、初級、中級、上級と3段もつけられていた。登録者総数は58名、それが2年後の71-72年度には113名に増加している。これに対応するような日本語のコースを設けてほしいという学長宛ての要請に97名の学生が署名して1969年に提出している。

当時は日本も高度経済発展時代に入った時期だったから、歴史学科、人類学科の他に経済学科や経営

学部にも日本関係の研究をする教員が加わっていたので、学生たちが日本に関する知識をいろいろな角度から勉強する機会が増えていた。これらの新入教員の場合、日本研究者として採用されたのではなく、それぞれの学科で必要な専門分野に該当する候補者中で、たまたま日本関係のテーマを追求している人が選ばれたということだった。それは私がマギルに就職した際、総合人類学の分野のうちで先史時代を扱う考古学者という資格で採用されたわけで、日本研究が主な理由ではなかったのと同様だ。いずれにしても、“たまたま”日本研究をしている教員がふえて、日本に関するコースへの登録が上昇するなかで日本語・日本文学の講座を設置する必要が痛感されていた。

そのため、在モントリオールの財団、日本商社などに援助をもとめることになった。それは1960年代の大学

拡張時代がおわって1970年代に入ると大学財政の縮小期になったので、外部からの援助資金でもなければ新講座を設けるのはとても無理だという状態になっていたからだった。私は「東アジア研究センター」創立以来その運営委員会に属しており、日本研究分科委員長も務めていたので、副学長、人文学部長、当時のセンター長らと財団巡りをしたり、日本国大使や総領事との会談に同席したりした。各方面との交渉が難航中のところ、1972年に国際交流基金が発足し、各種の公募プログラムが公表された。外国の教育機関に日本関係の講座を新設・拡張するのを援助するプログラムに早速申請書を提出した。その結果、1974年度から3年間日本語と日本文学を教える教員のポストを新設するのに必要な助成金を支給されることになった。この資金の条件は教員の給料の1/3は受け入れ側が受け持つこと、そして3年契約の終了後は受入れ機関の常設ポストとして継続するということだった。この条件はどうやら満たすことができ、日本語・日本文学担当の教員のポストは継続、そして1985年には交流基金の講座拡張プログラムに再び申請して、日本語・日本文学のポストをもう一つ増やすことができた。東アジア言語・文学研究学科の専任の教員は中国語と日本語と2名ずつということになった。マギル大学のロゴマークの両脇に“アジア研究センター”を日本語と中国語で書きこんだTシャツはその頃センターに属していたスタッフと学生がデザインしたものだ。

実はその頃、1983年から88年の5年間、東アジア研究センター長と東アジア言語・文学科の学科長は私が務めていた。センターは東アジアに関する学際的な研究と研修を促進するベースという意図の機関で専



▲マギル大学のロゴマークに東アジア研究センターを中国・日本語で入れたTシャツ

任の教授陣はなく、東アジア言語・文学科には専任4名と2-3名のパートタイムの教員が属していたが、いずれも管理職にはむかない若い方達だったので、センター長、学科長は他の学科に籍のある教授または准教授が務めていた。その順番が私のところにまわってきたわけだが、本学でのアジア研究はまだ揺籃期だったから、やりがいのある仕事でもあった。上記のように国際交流基金に申請して常設講座を徐々に増やしてゆく一方、同基金の客員教授プログラムにも毎年応募して、1985-86年度には筑波大学から文化人類学者の綾部恒雄先生、次いで86-87年度は早稲田大学から鈴木弘先生、そして88-89年度には私の母校、津田塾大学からのちに学長になられた飯野正子先生に来ていただいたように手配してセンター長の最後の年をおわっている。客員教授プログラムは、日本の文化、社会に関する講義を日本から来られた先生から学生たちが直接聞く機会を作るとともに、本学の教員と日本の研究者との交流を促進するのに有効だった。

連載 ◆ 第 19 回 ◆

アルカ通信 No.213 / 2021. 6. 1

19. カナダ日本研究学会の誕生：JSSACからJSACへ

1987年の10月9、10日に、カナダのエドモントン市にあるアルバータ大学の経済学部主催で、戦後の日本社会の政治・経済・社会的変容に焦点を当てた「近代日本カンファレンス」(Modern Japan Conference)という表題のカンファレンスが開催された。当時は、日本経済の“バブル景気”が話題になっていた頃で、カナダの社会科学者たちもそれぞれの専門分野の枠組みの中でこれに関連するテーマに取り組み、研究結果をそれぞれの学会で発表していたので、その人たちが一堂に会して話し合う機会を作ってみようという計画だったようだ。国際交流基金、日本大使館、総領事館の支援を得て、カナダ各地から政治、経済、人文地

理、社会学、人類学など社会科学各分野の研究者約20名を招聘したのに加えて、日本カナダ学会から社会学者の小浪充教授をゲストスピーカーとしてお招きし、それに地元のアルバータ大学から10名以上の参加があって、日本大使館、総領事館、カナダ外務省、アルバータ州政府の代表者も入ると約50名の集まりとなった。そのような“社会科学者”の集まりに考古学者がどうして紛れ込んだのかとおもわれるかもしれないが、前にも触れたように、北米では先史考古学は総合人類学の一分野とされているので、マギル大学で日本に関する研究をしている人類学者の代表として私が招かれたのだろう。モントリオールからはもうひとり、



## 20. マギル大学での考古学の授業

1980年代から1990年代にかけては前回で紹介した日本研究学会の創設に関与したり、国際学会参加のためたびたび出張したり、学内では東アジア研究センターの拡張に務めたりと忙しかったわけだが、このあいだも本職の考古学の授業は受け持っていた。どんな授業を受け持っていたのかを話す前に、ケベック州の教育制度とマギル大学の学生層の構成を簡単に説明しておく。カナダでは教育関係の政策は州政府の管轄に属する。ケベック州は1970年初期に教育制度を大幅に改革した結果、日本で戦後に小・中・高校6-3-3の学制と4年制の新制大学が導入される以前の制度に似た形になっている。小学校6年を経て、ハイスクールで5年間学んだあと、2年間カレッジ(短期大学)で一般教養課程を習得してから大学に進学し、普通3年間に90単位を修得してBAの学位を授与される。但しこのコースが適用されるのはケベック州の教育課程を経てきた来た学生の場合で、それはマギル大学の場合、学部学生総数の約半数、残りの半数のそのまた半数(全体の1/4)はカナダの他の州の出身者、そして残る1/4はUSAも含めた諸外国から来た学生が占めている。これらケベック州以外から来ている人たちの多くは、フレッシュマン・プログラムで一般教養科目を30単位履修してから90単位の学位プログラムに登録するので、合計120単位、4年間の学生生活を過ごすことになる。

マギル大学の場合、ほとんどの科目が3単位とされているので、90単位修得するには30科目履修するというので、これを3年間にわけると、一年に10科目、すなわち秋学期、冬学期に5科目ずつの授業を受けるとことになる。日本の大学では1科目の授業は週に1度ということが多かったように記憶しているが、マギルの場合は1科目3単位の授業時間は週に3時間、これを月・水・金1時間ずつ(教室の入れ替えに時間がかかるので実際には50分)週3回に分けて講義するか、または火・木曜日に週2回90分(事実80分)ずつという構成で時間割が組まれている。秋学期は9月始から12月初旬までの13週間、1月-4月の冬学期も同様に13週間で、それぞれ39時間の授業時間が1科目を形成するという仕組みになっている。

私がマギル大学で教鞭をとった最後の年は2003-04年度、その年の人類学科の教員総数は17名、そのうち考古学者は4名で、1/4弱にあたる。その年のカレンダーに列記されている人類学科の学部学生

向きの科目総数は57、そのうち考古学に関するものが14で、これも1/4弱に当たるが、リストされている科目のすべてがその年にならずしも開講されたわけではない。

## 東アジアと新世界の先史時代

人類学科のうちで、考古学を専攻する学生の必須科目として、「考古学理論の歴史」、「考古学の研究方法」などがあるが、これらは私の同僚が受け持っていたので、私が就職以来ほとんど毎年のように受け持っていたのは「先史時代の東アジア」(Prehistory of East Asia)と題する科目。これを39時間の講義時間でどの様に扱ったのか、今手元もとに残っているシラバスをながめてみると、科目の目的として2項目を明記している。その一つは中国、朝鮮、日本、モンゴル、と東南アジアの一部、シベリア東部の先史時代について主な問題点を考察すること、その問題点とは、ヒトの出現と拡散、各地の狩猟採集民の道具と社会形態の比較、農耕の起源と伝播、文字のある社会の成立と周辺部との交流など。もう一つの目的はこれらの国で考古学が現在の社会で果たしている役割を考察することだ。この科目は人類学、考古学の初心者向けの科目をすでに履修した学生を対象にした中級レベルの科目として月・水・金曜日の時間割なら36回、火・木曜日なら24回の講義をしたわけだが、更に上級生向けの科目として「先史時代東アジアの諸問題」というセミナーも隔年程度に提供していた。

これに次いでしばしば教えたのは同じく中級向けの講義と上級向けセミナーを組み合わせた、「Early Prehistory of the New World」という題の科目、「新世界の先史時代の始まり」とでも訳せばよいのだろうか。東北アジアの石器時代の延長としてのアメリカ大陸への人類移動、更新世末期から完新世への気候変動への適応、そしてクロヴィス石器文化より古いとされる石器群の検討など。新世界へ人類が入ったのは、いつ頃、どこから、何度あったのかは今だに活発な論議が続いている。実のところ、新大陸北部の氷原が解けて大型獣狩猟民の南下が可能になる前に、海岸つたいの狩猟採集民の移動があったのではないかという論旨を追求した論文集が、日本列島関係の資料に関する拙文もふくめて、近いうちに出版されることになっている。

フランス語系のモントリオール大学から同じく人類学のパーナード・ベルニエ教授が参加されていた。

招待された20名の日本研究者はこれが初対面という場合がほとんどだった。研究発表やそれに対するコメントが進行するにつれて明らかになったのは、多くの研究者が同様のテーマに、異なった角度から取り組んでいるということ、そしてそれらの成果を補足しあえば更に興味ある結果が得られるだろうということだった。そのような学際交流を通してカナダの社会科学者による日本研究を促進するためにも、このたびのような集りを定期的に設ける機構を作ろうという気運がもりあがって、第二日の最後のセッションでカナダ日本研究社会科学会(Japan Social Sciences Association of Canada)を創設することに意見の一致をみた。新しい学会の分野は政治、経済、人文地理、社会学、人類学と1945年以降の現代史。学会の主な目的はエドモントン会議のようなカンファレンスを各地の大学持ちまわりで定期的に開催することで、その第一回大会はモントリオールで開催するという事になった。少し離れた席にいられたモントリオール大学のベルニエさんが「お手伝いしますよ」と声をかけてくださったので、ベルニエさんと共同で大会実行委員をお引き受けすることにした。その時の決議では二年後ということだったが、それではあいだが開きすぎると意見がでて、モントリオール大会は一年後の1988年10月に開催されることになった。一年間で準備するのはかなり忙しかったが、国際交流基金、カナダ外務省からの援助にくわえてマギル大学の人文学部、経営学部、大学院など各種機関からも支持を得て、第一回会合は参加者64名の盛会だった。ちなみに1988年当時の会費は年額10ドル、会員総数は48名だった。

学会創設の際、学会の名称も、会則の草案にも「社会科学」を強調し、「現代史」を1945年の終戦以来と限定するなど、専門分野を細かく設定したのは、当時のカナダでの日本研究の現状に対する不満の表現でもあった。当時カナダには1968年に発足したカナダアジア学会(Canadian Asian Studies Association, 略してCASA)があったが、南アジアなどの研究者に圧倒されて日本研究者は影がうすく、しかも日本関係の発表は日本語教授法、日本文学、歴史、宗教などに限られていて、政治・社会・経済などに関する研究発表はほとんど皆無だった。エドモントンの「近代日本カンファレンス」のように学際的な広場で意見を交換するような機会はなかったのも、エドモントン会議の雰囲気再現しようという意向で、会員の専門分野を細かく規定したのだが、まもなく参加部門を広げる動きが

はじまった。まず1988年の第一回大会で、比較法律学、社会心理学、教育学を加えようとの提案を受け入れた。さらに1989年にトロントのヨーク大学で開かれた第二回大会では言語教育も文学の研究も社会的背景を考慮するから社会科学と無関係ではないというもつともな論議で、結局、あらゆる分野の研究者を歓迎することになり、会の名称も、「カナダ日本社会科学会」から「カナダ日本研究学会」(Japan Studies Association of Canada)に変えることになった。いずれの場合も、会の名称はながいので、頭文字をつなげて、前者はJSSACと呼び馴らしており、「ジェイサク」と発音していたのが、新学会では「S」が一つおちて「JSAC」になった。但し発音はやはり「ジェイサク」でかわらない。上で触れたCASAは2018年に解散したそうだが、JSACの方は今も大いに健在、多いときは年次大会に200名以上の参加がある。2021年現在の会長はサスカチュワン大学の政治学者、キャリン・ホルロイド博士、学会事務はヨーク大学の太田徳夫先生が管理してくださっている。

このような次第で、カナダの日本研究学会には当初から関係しており、会則が発効するまでの臨時会長役を1988-90の二年間を務めた後、1999-2000年と2004-2007年に2度会長を務めさせていただいた。本会の創立30周年を祝った2017年には「本学会への生涯貢献賞」の第一号をいただく光栄に浴したが、創立時からの生存者は数少なくなっているのも、過去30年間カナダでの日本研究の発展に努めてきた研究者一同を代表して「貢献賞」をいただいたのだとおもっている。その数少ない生存者のひとりがこの写真で私に賞状を渡してくださっているプリティッシュコロンビア大学のエッジントン教授、1988年のモントリオールでの第一回会議では筑波学園都市の建設について人文地理学の見地から研究発表をしていただいた。



▲カナダ日本研究学会への生涯貢献賞を2017年に受賞



▲1987年の「近代日本カンファレンス」の論文集



## 先史社会の食物と栄養：ジェンダーの考古学

上記の2科目はいわば私の常設科目でほとんど毎年、少なくとも隔年に提供していた。これに加えて、1980年代と1990年代に新テーマの2科目を導入した。1981年の春学期からはじめたのが、「先史社会の食物と栄養」(Food and Nutrition in Prehistoric Societies)という科目。一般に生態学的関心が強くなってきた頃で、考古学の動向も、石器、土器などの文化史的位置付けに焦点をおいた姿勢から、生業形態や食料獲得方法などを重視する方向に向かっていたが、出土した動植物遺体を列挙して、“こんなものを食べたのでしょうか”で終わっていることが多かった。この科目ではそれを一歩すすめて、それら動植物をどうやって食べたか、そしてそれが人体の栄養的必要にどう作用していたかを追求してみる。その手段として、炭素・窒素の安定アイソトープ分析や微量元素分析など最近に開発された調査手法を紹介した。一年次の学生でも登録できる初級レベルの科目として開講したので人類学以外の学科の学生たちが選択

科目として予想外に多数登録して、一時手に余ることもあった。

1999-2000年度の春学期に導入したのは「ジェンダーの考古学」(Gender in Archaeology)という科目。1980年代、1990年代はジェンダー論へ関心が高まってきたときで、私自身1998年7月にインドネシアで開催されたインド・太平洋先史学会(IPPA)で“日本考古学における女性の関与と考古学知識の解釈”と題する発表を羽生淳子さんと共著でしており、同年10月には、コロラド大学のS. Nelson教授とヘブリュー大学のRosen-Ayalon教授がイタリアのベラジオにあるロックフェラー・センターで主催された国際シンポジウムで“日本の先史時代のジェンダー”と題する発表をしたばかりだった。この上級生向けのセミナー形式の科目では、当時いくつか出ていたジェンダー関係の論文集所収の研究報告について、男女の分業体制、社会的地位、世帯・親族社会の構成、そして、考古学者のジェンダーが対象となる社会の解明にどのような影響を与えているかなどを考察した。

## 連載 ◆ 第21回 ◆

アルカ通信 No.217 / 2021.10.1

### 最後のサバティカル(1989)とこれも最後の役職(1991-96)

#### 21.1. サバティカル研修：環状土籬と亀ヶ岡現象

前回に紹介したような考古学の科目の授業をしつつ、新設間もない東アジア研究センター長と東アジア言語・文学科長を兼任し(18回、No.211)、これも発足したばかりのカナダ日本研究学会の第一回大会をモントリオールで開催したり(19回、No.213)で、1988年代の後半はずいぶん忙しい毎日をおくっていた。学科長・センター長のお役が終わった翌年の1989年は12ヶ月のサバティカルが許可され、国際交流基金に申請していた研究費もOKとなったので、久しぶりに、自分の研究をする機会をつくることができました。7年に一度とれるサバティカルはこれが3度目、そして引退の年が近づいているのでこれが最後となる。この度の研修テーマは列島北部の縄文後・晩期に見られる環状土籬やストーンサークルに象徴される地域社会の構造を、北米の北西沿岸部や当時のソ連沿海州などの狩猟栽培民について各国の研究者が提出している理論に照らして解明してみようということだった。2度の資料採集旅行を計画、一度目は6、7月の2ヶ月、2度目は10月から11月にかけての1ヶ月。いつも

お世話になっている芹沢長介、佐原真、小林達雄、吉崎昌一、林健作、菊池徹夫をはじめとする諸先生から貴重なアドバイス、紹介状をいただいて、北海道千歳の有名なキウス遺跡から大湯のストーンサークル、亀ヶ岡遺跡などを実見し、多量の文献資料を集めることができた。東京では早稲田大学で交換条約による外来研究員として大学の施設を使わせていただき、京都では国際日本文化センター(日文研)で埴原和郎先生を代表者として進行中の「日本文化の基本構造とその自然的背景」と題する共同研究プロジェクトに客員研究員として参加させていただいて「日本と北米の狩猟採集民一特に日本列島北部の縄文後・晩期について」と題する発表をした。さらにその年の8月にシアトルで開かれた『環太平洋の先史時代』と題するカンファレンス(Circum-Pacific Prehistory Conference)では、日文研の安田喜憲博士と北大の五十嵐八枝子博士からご教示いただいた資料を大いに参考にさせていただいて、環状土籬という現象を自然環境の変動に位置付けることを試みた。

#### 21.2. 準副学長としてアジア方面との提携強化(1991-96)

シアトルのカンファレンスでの発表はエイケンズ、リー両氏共編の論集(C. Melvin Aikens & Song Nai Rhee, eds, 1992)に所収されているが、これをもう少し拡大した形をにしようと思っていたところ、サバティカルの翌年からまた役職に就くことになった。この度は前の役目より二段ほど上の職で、Associate Vice-Principal (Academic)という役名、教務担当の準副学長とでも訳せばよいのか。大学本部の管理

職にも女性を入れなくてはという気運が出てきた頃だったので、教務担当の副学長に任命された男性の生物学者の補佐役としての準副学長には人文系の女性候補者を意識的に探したときいている。現在はマギル大学の学長も人文学部長も女性だが、当時、女性で準副学長レベルの職についたのは私がはじめてだったようだ。

##### 21.2.1. 交換協定の整備

大学本部での私の仕事場は学長室の隣の部屋。当時の学長はデイヴィッド・ジョンストン(David Johnston)法学部教授で、この後2010-2017年にはカナダで英国女王を代表するカナダ総督(Governor General of Canada)に就任された方だった。お隣の部屋から時々ふらりとはいってこられてお喋りした際、マギル大学の国際性に関する話題がよくでた。本学はカナダの中でも外国から来ている学生の率が一番高く、全体の約1/4をしめるということは前にも触れた(20回、No.215)が、1991年頃の“諸外国”のほとんどがUSAまたはヨーロッパの諸国だった。交換協定校のリストについても同様。しかも驚くほど多数の大学と交換協定を結んでいるにも拘らず、協定に基づく留学

生は、マギル側も諸外国側も非常に少なかった。それは、協定による短期留学のための手続きが非常に煩雑で、いろいろな書類をアチコチの窓口から集めてこなければならぬので、よほど熱心な人でない限り、交換留学はあきらめてしまうということらしかった。そのようなことについて学長とお喋りした結果は、私がアジア方面に出る機会を利用して、太平洋の向こう側の教育・研究機関との提携を強化して、マギル大学の“国際性”をもっとバランスの取れたものにしようということ、そして、交換留学を促進するために留学生の送り出し・受け入れの手続きを整備しようということが私の仕事の項目に加えられた。

##### 21.2.2. 夏期英語研修

その頃、日本の諸大学の学生が夏休みを利用してUSAやUKへ英語研修にでるのが目立ちはじめていた。マギルへも来てもらいましょうという話がでて、そのようなプログラムを大学のどこかに設置するのも私の仕事の一部となった。英語夏期研修の話が出たのは私が1991年に就任して間もない時だったが、東アジア研究センターの客員教授としておいでいただいた、津田塾大学の飯野正子先生(18回、No.211)をはじめとする日本での知り合いの方々のご尽力で、翌年の1992年にさっそく開講することができた。開始当時のプログラムのタイトルは“Summer Studies in English and Canadian Culture”、英語だけでなくカナダの文化を学んでいただくという趣旨で、4週間の研修の午前中は英語、午後は博物館や原住民集落の見学などにあて、週末にはオタワの国会議事堂、オプションとしてナイアガラの滝や赤毛のアンで



有名なプリンスエドワード島への小旅行などもみこんだ。現在プログラムの内容はかなり変っているが、30年前に飯野先生たちのご尽力ではじまった夏期研修は「アジア人学生のための夏期英語イマージョンプログラム」として今も継続しており、毎年100人前後の学生が日本から参加している。



### 21.2.3. 日本での考古学実習

准副学長の任務とは直接関係はないが、私が准副学長室にいた1994年から数年間、「考古学実習」という科目を夏期学期に提供して、マギルの学生を日本での行政発掘現場の作業員として参加させていただくことを試みた。滞在期間4週間のうち最初の1週間は奈良文化財研究所の宿泊施設などに合宿してオリエンテーション、続いて発掘現場に分散配置して発掘作業を経験するという仕組みだった。学生を受け入れて下

さった各地の文化財センターの方々は勿論、プログラムの構成、学生の配置などについて、北上市埋蔵文化財センターの稲野裕介氏、国学院大学の小林達雄氏、奈良文化財研究所の松井章氏、大阪市考古資料センターの岡村勝行氏、天理大学の置田雅昭氏などに大変お世話になった。学生にはとても好評なプログラムだったが、1997年あたりから経済状態を反映して学生の配置が困難となったので中止したままになっている。

連載 ◆ 第22回 ◆ 最終回

アルカ通信 No.219 / 2021.12.1

### 22.1. 関西学院大学客員教授

准副学長の任期を終了した翌年度は関西学院大学の客員教授として1997年8月末まで日本に滞在した。客員教授としての職務は学部で「人類学基礎演習」と「理論社会学特論」の2科目、大学院で「社会学理論特殊講義」という科目を受け持つこと。一年生を対象とした「人類学基礎演習」では総合人類学の見地から現生人類の発生と拡散、カナダの原住民の起源と現状、縄文人との関係、「日本文化」の形成過程などについて日本語で講義した。3、4年生を対象とした「理論社会学特論」と大学院の「社会学理論特殊講義」は一コマに合併して、英語で講義してくださ

いとのことだったので、日本文化論、単一民族論などについてカナダで出版された論文集をテキストにして、国外での日本研究にも言及した。このほかに、外国から来ている交換留学生を対象に、これも英語で、日本文化の形成、考古学が現在の日本社会に占める役割などについて講義したが、いずれも毎週一コマ90分の授業なので、授業の合間に遺跡見学、聞き取り調査などに日本各地を回ることができた。四月末にカナダの冬学期の講義がおわると、夫フィリップがたずねてきて、各地で講演をしたり、一緒に遺跡巡りをしたりした。

### 22.2. 旧石器遺跡捏造の発覚と検証

1997年の春、フィリップと一緒に仙台の芹沢長介先生をおたずねした際、近辺の遺跡を見学する手配をしてくださった。捏造事件発覚の糸口になった上高森もその時案内して頂いた遺跡のひとつ。95年の第3次発掘で埋納遺構が出土したB地点の地層は、近くの崖面に明瞭に見える層位と対比すると、テフラ年代57万年前の地層に相当するとのこと説明を聞いて「B地点ではこの上部の地層には何があったのですか」とお尋ねしたところ、このあたりの土は数十年前に取り払われていたという御返事に、フィリップと私は思わず顔を見合わせた。口に出さなかったが「それではこの地層面は何十年間も差し込み可能の開放状態だったわけですね」という意味の表情を取り交わしたのを、ご案内いただいた方たちが読み取られたのはあきらかだった。

2000年11月の毎日新聞社のスクープにはじまる前・中期旧石器遺跡捏造の発覚と検証の経緯、結果については専門家・一般人向けの出版物が国内で氾濫していたが、国外での関心の高さを実感したのは2002年3月にデンバーで開催されたアメリカ考古学

協会の年次大会だった。この協会の年次大会には毎年数千人が参加して、多数の同時セッションに分かれて研究発表・討論がおこなわれる。2002年大会のプログラムによると、当時カリフォルニア大学サンタバーバラ校にいられた故裴炯逸 (Hyung Il Pai) 博士と天理大学のウォルター・エドワーズ教授が共同で企画された『日本考古学の過去と現在を探究する』と題するセッションで私が「一体どういことが起こったのか?日本の前期旧石器捏造事件の検証」という発表をすることになっていた。私の順番が回ってきて演壇に立って驚いたのは、100名くらい入るセッション会場が立席しかない満員状態、そして私の発表が終わると、聴衆の大半が他の会場にむけて出て行かれたことだった。日本の旧石器事件のことだけを聞きに来られたということらしかった。

“その後どうなったか?”ということ報告する意図で、2014年6月にモンゴリアのウランバートルで開かれた東亜考古学協会 (Society for East Asian Archaeology) で『日本の前期旧石器研究の再出発』 (Starting Over Again : the Early Palaeolithic

Research in Japan Today)と題するセッションを東大の佐藤宏之教授と共同で企画し、金取、竹佐中原、砂原、草水台、大野、入口などの遺跡の調査者に現状を報告していただいた。それら研究報告の

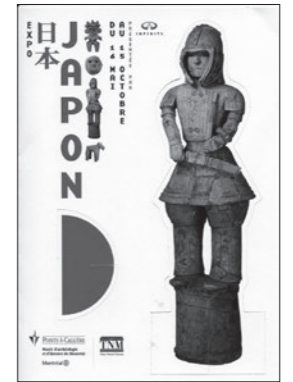
### 22.3. マギル大学名誉教授

この時点では私はすでにマギル大学から引退して名誉教授の称号をいただいていた。2003年末で引退した後も、東アジアの大学との交換協定や夏期研修に関する交渉などには関与しており、カナダの日本研究学会の会長 (2004-2007) と上記の東亜考古学協会という国際学会の会長 (2004-2012) を同時に務めるなど結構忙しくしていた。そのほか各種の選考委員会、評価委員会、諮問委員会など頼まれるままに引き受けて引退前よりも忙しくなったようだった。そのうちでもやりがいがあったのはモントリオールの考古・歴史博物館が東京国立博物館と提携して日本考古学の展示会をした際、アドバイザーとしてお手伝いしたことだった。展示会は2006年の5月16日から10月15日までの5ヶ月間、国立博物館を経て借用した展示品は、国宝の埴輪一点、火炎土器や銅鏡、船形埴輪など重要文化財16点を含んだ総数150点。展示品の説明書は、単なるカタログではなく、展示品の文化的背景などを一般人向けに説明した解説書を英・仏両語で準備しようというのが博物館の意図で、私の役目はその内容の正確さを確認することだった。結果としてなかなか立派な本が出版できたと思っている。

忙しいなかでも中国、韓国、沿海州の各地、たまにはヨーロッパの都市で催された各種の国際学会には毎年のように出席していたが、2018年9月にベトナムの古都、フエ市で開催されたインド・太平洋先史学会の年次大会には特別の目的があって参加した。この年は私の旧師、ハラム・モヴィウス博士が、モヴィウスライン説を発表してから70年目にあたるので、“70年後

一部は協会のウェブサイト掲載のブルティンに掲載している [Bulletin of the Society for East Asian Archaeology (BSEAA), Vol. 3, on SEAA-web (http://www.seaa-web.org/bul-cont2016.htm)]

のモヴィウスライン” (The Movius Line 70 years later) というセッションを計画して、各国の研究者に連絡したところ多数の参加希望者があって、8:30AMから5:00PMまで終日のセッションとなった。1978年に握斧が発見された朝鮮半島に関する数点の論考からはじまって、中国各地で発掘されている斧型石器に関する考察、そして日本列島、東南アジアの島嶼を経て、最後にエクセター大学のロビン・デネル (Robin Dennell) 博士の“モヴィウスラインは70年でもう沢山だ” (Movius Line - 70 years is enough) という御意見を発端とする一般討論で終了した。ResearchGateなどのウェブ統計によると、出版された拙文のうち一番多く読まれているのは Encyclopedia of Global Archaeology (Springer 2014) 所載の“Movius Line” という短文だというのは、モヴィウスラインに関する意見は様々ながら、関心はいまだに高いということだろう。モヴィウス博士指導の特殊購読 (第2回、アルカ通信No.179) で始まった私の旧石器研究のキャリアも、モヴィウスラインと同様、“70年でもう沢山だ” という時点がちかくなってきたという感慨で、私の『履歴書』を終結させていただくことにする。



▲モントリオールで開催された日本考古学展の案内状



井川史子 Fumiko Ikawa-Smith

略歴

- 1930年 神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる  
1948年 奈良女子高等師範学校附属高等女学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】  
1953年 津田塾大学英文学科卒業  
1953-54年 東京都立大学【現：首都大学東京】社会学研究室助手補  
1954-55年 東京都立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程  
1955年 フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学  
1958年 ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)  
1958年 ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)  
1974年にハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与  
1964-66年 トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師  
1967-69年 マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員  
1970-2003年 マギル大学人文学部人類学科 専任教員：2009年以来名誉教授  
1999-2000, 2004-2007年 カナダ日本学会会長  
2004-2012年 東亜考古学会会長  
2005年 瑞宝小授章  
2017年 カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

文化財 歴史・考古  
の情報誌  
発掘出土情報

株式会社ジャパン通信情報センター

〒151-0066 東京都渋谷区西原3-1-8  
パレス代々木上原3F  
TEL 03-5452-3243 FAX 03-5452-3242

考古学最新図書情報は  
六一書房ホームページをご覧ください  
<http://www.book61.co.jp/>  
E-mail [info@book61.co.jp](mailto:info@book61.co.jp)

六一書房



〒101-0064 東京都千代田区  
神田神保町2-2-22  
TEL 03-5281-6161 FAX 03-5281-6160

アルカ通信 別冊  
「考古学の履歴書 井川史子 Fumiko Ikawa-Smith」編

発行年月日 2022年 月 日  
編集・発行 考古学研究所 株式会社アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
E-mail [aruka@aruka.co.jp](mailto:aruka@aruka.co.jp)  
URL <http://www.aruka.co.jp>